

# 第一部 探究活動の「モデル」を探して

## —講演録

1980年以降の「新しい学び」あるいは日本の教育現実を象徴する5人の講演を収録。一つ一つの講演に隠された「探究活動」のモデルを探りながら、多声的に響きあう個性豊かなこれらの講演に見いだされる一つの物語を紡ぐ。

講演録は録音データを文字起こし後、編者によって次のような加工が行われた。①章・節立て、②分かりにくい箇所の追記（编者追記は□で括っている）、③编者注の追記。これらの加工後、講演者に原稿を渡し、修正と確認をしてもらった。すべての講演録には编者により、解説の代わりに小考察をつけ、それらを統合する総合考察を部末につけた。なお、板倉の講演・質疑応答については舟橋春彦氏が校正を補助してくれた。

# 講演『二十一世紀の教育、そして二十二世紀へ』

寺脇研



## 1. 生涯学習時代三十年を振り返る

京大はアウエイ？

皆さん、こんにちは。今日はこの博物館にお招きを  
いただいでですね、いま、大野先生からあったように、  
私はいろいろなことやっています。国賊とか売国奴と  
言われる場合もあるし、ちよつと褒めてもらう場合  
もある。大体どこかに行くんですね、アウエイかホー  
ムかどつちかなんですよね。京都造形芸術大学におり  
ますので、いくらなんでも自分の大学にいきゃホーム  
なんですけど、京大というのはどつちかというアウ

エイ感があるところだったんですね。いまの話を知  
てると、だんだんこう、今日も呼んでいただいたしホ  
ーム感がちよつと出てきているのかなという感じが  
いたします。

いまからそのアウエイだったのは、今日のテーマで  
ある探究型学習、そういうふうに言えばよかったです  
ね。言葉は大事だと言うけれども、ようやく最近、役  
所が言葉をつくって、それを押しつけても人がなんで  
か知らないけど文句を言わなくなった。前は役所がそ  
んなのやるといふと非常に反発があったので。「ゆとり  
教育」というのは役所がつくったわけではなくって、

メディアのほうでつくった名前ですけどね。この頃、役所もいろんなことをつくって。それこそ若い人の話を聞くというのはちようど青翔高校のポスター展示で高校生から研究の中身を聞いてましたけど、こうやってだんだん時が経つてくると、探究型の学習をした若者がどういうことをやるのか、どういう人間になっていくのかということ。つまり探究心というものが……

### 高校生と考える理想のAO入試

先週も、「えらい目」にあいましてですね、一カ月くらい前ですか。去年の暮れに高校生たちからオファーがあつてAO入試について議論がしたいと。これは大体、早稲田とか慶応のAO入試を受けようと思つている子どもたちなんだけど、AO入試が評判悪い、そんなものは受験勉強から逃げているとかなんとか高校の先生に言われている。ところがなにかこの頃は、東大や京大もAO入試を取り入れるって話になってきちゃったんだけど、一体どうなってるんだみたいな話になってきて。だからいろんな学校の生徒が「声をかけてきて」。この頃、学校のまとまりから声をかけられるてこ

とはまずないですね。

生徒と同じことに興味をもっている子どもや若者が、ネットで連絡取り合つて。「こういうのやりたいと思うんで、お前来て」みたいなことを、「手伝え」と言われるんで、AO入試についてというディスカッションに半日つきあつて。

今あるAO入試が必ずしもいいとは限らない、じゃあどんなAO入試をした方がいいのかということをもんで考えて話し合つて。それに付随して自分が大学をつくるならどんな大学にするのか、みたいなことを話し合つて。つまりディベートじゃないとさつきおつしやつてくださいましたけど、熟議型、ワールドカフェ型ですかね。みんなでこう話し合つて、みんなの意見を取り入れながら、このグループではこんなふうなことを考えましたよ、ということをこっちはこんなこと考えたよ、こつちもおもしろいねみたいなことをやるわけですけどね。

一つ印象的だったのは、とにかくいまの入学試験は——一般入試はもちろんのこととして——AO入試ですら自分のために全然なつてない、と「いう意見があつ

た」。相手のためにやってるんだと。自分が入試を受けて賢くなつたという実感がAO入試ですらない。だから、なんでその入試を受ける学習者の側がなんの恩恵もなく、教育者の側のために、教育者の側がレベルの高いやつを集めるために入試をやっている。学習者にとつてはなんのメリットもない。なので学習者にとつてもメリットのある入試を、つまりその入試に落ちたとしても、この入試を受けて自分のためになつたと思うような入試というのはないんですかね、みたいな話になつて。あ、その発想は素晴らしいなと思いましたが、ただ具体的にはなかなか難しくって、そのとき高校生たちが考えたのは、みんながインターンシップをしていきなさいって言って。インターンシップをやってきた結果で入試をしてくれれば、つまりインターンシップをするという体験はできるわけだから、仮に試験に落ちたって、そのインターンシップをしたという体験は自分のために活きますよね、なるほどね、というようなことを話してたんですね。

### 子どもたちと文科省へ

そのときに、最終的に三つのグループができて三つの案が出て。その案がよその案——自分のところじゃない案——で、どの案がいいのかというのを最後に投票して。優劣というわけじゃないんだけど、みんなが面白いと思つたのがどういふことなのか、ということをやるとね。競争じゃないけど、もしこのなかで一番よくできたら、なんかいいことがあったらいいねみたいな話になつて。「なに？」って言ったら、「じゃあ一番よくきたところは文科科学省に連れて行って下さい」っていうわけです。

別にはじめてのことじゃないんです、私がそういうことやつていふというのを、彼らも噂で聞いてるわけなんですよね。文科科学省を見たいとか、文科科学省の中で文科科学省の人に話を聞きたいとかいう高校生や大学生がたくさんいるんですから、ある程度のとまるになると、「じゃあいいよ」と連れて行って。私が連れて行くわけにもいかないんで、役所をクビになつた人間が引率していくとすごい役所への嫌がらせみたいになるので、後輩のみんなに頼んで行く。もちろ

ん、当然官庁というのは開かれた官庁であるべきなん  
で、別に誰が行ったって本当は見られるはずのものな  
んですけどね。それが高校生くらいになると学校単位  
で来い、とか、何カ月前とかに届け出るとか、いろい  
ろあるらしいんで。まあまああって入れてやっているん  
ですよ。それを聞いているもんですから、それにじゃあ  
連れてって下さい、と。「いいよ」って。

でもなかなか三つとも良かったから、じゃあみんな  
この中の希望者みんな連れて行くよって言ったら、そ  
のときいたのが二十人くらいだったんですけれども、  
なんかわれもわれもと膨れ上がって 友だちも連れて  
行きたい、友だち連れてっていいですかという話にな  
っちゃって、結局その約一カ月後の先週、文部科学省  
に四十人くらい高校生が来ちゃって、えらいことに。

「えらいことに」というのは、見学するのは四十人  
だろうと十人だろうと構わないんですけどね。ただ見  
学するだけではないかないので、そこで文部省の話を開  
く、これも十人でも四十人でもそんな変わらないんで  
すけれども、全部終わった後に文部科学省の現役の若  
い職員に何人か来てもらって、一人を五、六人で囲ん

で話を聞くみたいなことをやるういということにして  
るもんですから、四十人も来ちゃったらこっちも八人  
から十人かき集めなきゃいけないんで。文部科学省つ  
て夜中まで仕事していますからね、仕事抜けて来ても  
らって、私ども会ってもしらわなきゃいけないし、また  
いるんなことがあるんでなかなか確保するのも大変だ  
など思うんだけど、なんだかんだで、やっぱり若い職  
員が十人くらい来てくれて。

それで盛大にやりましたですけどね。大人呼んでお  
いて、若い役人たちを呼んでおいて酒も飲ませず飯も  
食わせずというわけにはいかないし、高校生にもちろ  
ん酒なんか飲ませられませんが、高校生たちにも  
物を食べさせなきゃいけないというんで、大変な費用  
がかかるというようなことで、高校生に言いましたよ。

「こういうのを『所得移転』というんだ」というふ  
うに。君らが大人になったときにこういうことをしな  
さい、そうやってじゅんぐりにね。そういうようなこ  
とをしなくても、そのぶんどつかにボランティアに行  
って、世の中のために働きなさいみたいなこと言った  
んです。

そのときにいま文部科学省の事務方ではナンバー二。事務次官の次の立場にいる前の初等中等教育局長ですね——まさに探究型学習をやることをずっとやってきた——前川「喜平」文部科学審議官がいつも話をしてくれるんですけど、「高校生が行くよ」って言ったら、「いや、私が話します」「女子ばかりじゃないよ」と言ったら、「別にそういうことはいいません」とか言って。一生懸命、文部科学省のやっていることとか、教育行政とはなにかということと話してくれてるんですけどね。そんなことになって、なんでも頼みを聞いてるところから春休みで大変なんですよ、一番高校生たちが暇になるんですね。三年生は受験が終わって大学に入るまでの期間だしね、二年生はちよつと受験に直面するまでなくて、この春休みはスケジュールがどこでこれやるから来てくれませんかみたいな話がある。それはやっぱり彼らの探究心、あるいは知的好奇心、そういうものを「ああ、忙しいからいけない。」というふうに言うわけには、私の立場としてはいけないね。他の人はそういうこと言ったっていいだろうけど、それを自分が推し進めてきた立場からすると、それに応えな

いわけにはいかんなと思ってやってるわけです。そういうところに行くとは完全にホームですね。みんな慣れちゃって。

こないだびっくりしましたよ、四〇人くらい来る中に文部科学省に入りたいと思ってる、五、六人いるわけですよ。私、高校生のとき夢にも思わなかったですね、文部科学省に入りたいなんて、思いもよらなかったです。「やってみたい」と言うから、「文部科学省に入るか、現場で教員狙うかどっちかですね」みたいなことを考えていたり。

### 「学ぶこと」と「働くこと」と「生きること」

自分の将来を考えるとというのも、ゆとり教育の目指した事柄なんですよ。私、よく言いますけども、「学ぶこと」と「働くこと」と「生きること」。この三要素をきちんと絡めてやっていかにやならない。「学ぶこと」だけ独立して、勉強しろ、勉強しろ、と言ってたんでは、「働くこと」や「生きること」にたいする考え方が育たない。それがずつと絡み合いながら小学校からずつと学んでいく、これを「生涯学習」というわけです

よね。

ゆとり教育というよりは、言わんとするとこは「生涯学習社会」をつくっていいことというので、生涯学習社会というのは常に学び続けるわけですね。だから「いい学校に入っているいい会社に入るだけの学び」だったら、いい会社に入った時点で、もう学ぶ必要はないわけけど、「いい会社に入っただけで自分の人生における働きは終わり、もうこれで満ち足りている」と思えばそこで終わる。だけど、「いや、ちよつとまた別のNPO活動もしてみたいとか別のボランティア活動もしてみたい」とか、「退職後いろんなことを、違う生き方をしてみたい」とかね。

私なんて役所をやめた途端、全然違う自由業みたいな生活をさせてもらってるんで、一身に二世を生きたりじゃないですけれども、いろんな経験をしているんな面白いことをやって良かったなど。私は五四歳で役所辞めて、大学の先生になるなんて夢にも思ってたのになんかそれにそれをやって、高校生と話すなんか夢にも思ってたのになんかそういうことをやり、映画を作るなんていうことも全然思ってたんだけど映画を

制作し、みたいなことをやっていって面白いな、いい人生良かったよね。生き方として人生満足じやみたいに思ってたっていく。

### 生涯学習元年

でもこれを言いはじめたのが「特別展の会場に」年表がばーつと提示してありましたけどね、この二十年、生涯学習というのを日本がちゃんと取り入れるようになったのは一九八七年ですから、これが生涯学習元年なんですよね。そこからいま二十八年ですか、三十年近くそのことばかりずっとやってきてるんですけどね。最初は評判良かったんですよ。「いやいいね。生涯学習の時代だね。いいよ、いいよ」。国民のみなさんも喜ぶしマスコミも喜ぶし政治家もそれでいいよって言ってくれてたわけです。なぜかって言うと、生涯学習はまづは大人の世界の話として理解されていたので、大人が学び続けるというのをけしからんと言う人はいませんからですね。

大人が生涯に渡って学び続けて図書館や博物館も利用しやすくなっていった。一九八七年以前は図書館と



いうのは、大学の図書館は外部の人を一切シャットアウトしているし、公共図書館だって平日は五時までで、土曜日は午前中で、日曜は休館なわけでしょ。それをいまみたいに夜まで開くわけだし、土曜だって日曜だって開けるようにしましょうというのが生涯学習、つまり学べるチャンス、いつでもどこでも誰でも学べるということをやっていくわけです。あるいは大学が社会人をどんどん受け入れましょう、放送大学でもどこでも学べるようにしましょうって、これを文句つける人はいませんよ。だからいいことやってますねと言われる。この頃はそんなに売国奴なんて言われてないですけどね。

段々その大人の部分が終わって、大人はいまさら教育し直せないから、子どもに戻せないから、「子どもを対象にも生涯学習を」やっていくとね。やはりなぜ大人で学び続ける人と、大人でもうとにかく会社人間で、定年退職したらなにもなくなっちゃう人のどこが違うのかというと、もう見えてくるわけですよ。会社人間で、つまりいい学校に入っている会社に入って、学校の先生だって学校退職したらすることなくなっちゃう、

みたいなことを言われていて。でも見渡すと、その前の時代ではあまり社会的に期待されなかったり、勉強しろとも言われなかった、女性のほうがいろんな趣味を見つかったり、友だちをみつかったり、地域の中で活動をしたりすることができ。いわゆる世の中で「俺は一生懸命日本のために働いたんだ」とか言っている人がそう「退職したらすることがなく」なっちゃう。

だとすると、いままでのいわゆるその詰め込み教育というか、戦前からずっと詰め込み教員でやってきているわけですね。明治以来ずっと詰め込み、その教育のやり方に問題あるんじゃないの。どうしても自動的になっちゃうから能動的にやっていく。もともと生涯学習の最大のテーマは、学習というところにあるわけですよ。生涯というところと学習というところに二つにあるわけですから。

### 生涯学習最初の十年

生涯学習という言葉を日本に定着させるのにえらい苦労しましたよ。まずとにかく、最初はみんな耳慣れないでしょう。シウウガイ学習と言ったら心身に障害

をもっている方が学習することだみたいと思われれるところに、「いや、そうじゃない」、この語「生涯学習」があるんですけど「言わないといけない」。割と国民のみなさんには五年くらい経ったら、「ああそういうことか、そういうことなのか、自分たちが学び続けているのか」と理解してもらえた」。

一番難しかったのはいわゆる「教育界」ですよ。ついこの間まで、みんな生涯教育としか、よう言わんのです。「生涯学習」と言っているところに、「いや生涯教育について考えないといけない」みたいなことを言っているくらいですからね。これはまた大変な話です。

一応、「大人を対象にした社会教育政策を」やってきたから、九〇年代に入って子どもの教育も変えていこうということ、九二年に小学校の指導要領を変え、九三年に中学校、九四年に高校の指導要領を変えたのが一回目の変革。二回目が二〇〇二年二〇〇三年、この頃に変えたのが二回目の改革ですけども。

この一回目の十年間というのはきわめて評判が良かったですね。そんなに怒られなかった。学校五日制を月一回から二回くらいしたって言われないうし、むしろ

経済界からはもつとやれと言われて、まだ生ぬるいとか言われちゃいまして、尻を叩かれていたんですよ。それはもうむしろ経済のご専門の方ならわかるでしょうけど、どういう時期かと言えば、このへんがバブルでブイブイ言わせていたんだけど九〇年代はバブルの反省期ですから、反省して、あの頃、えらそうにして

いた銀行は破たんして税金で補ってもらってなんかやっているわ、重厚長大産業も土地投機なんか手に手を出してみんな駄目になっちゃうわ、みたいなところで、ベンチャー産業みたいなところがどんどん伸びてた時期ですよ。従来型のいい会社というやつが、いい会社って言えないじゃないかと。やはり自分でイノベーションしていかなきゃいけない、そういうものが必要だよ、お前「そういう教育が」足りないよ、って言われて。

### フィンランドの学習者会

大体九七、八年ですか、経済同友会が出した教育をこう変えるべきだと文部省につきつけた報告書「一九七七年『学働遊合』のすすめ」渡辺渥委員長というのは、「学校は午前中だけにして、日本の学校は五日制

にして、午後からは自分たちでやりたいことをやれるように「しろ」。博物館に行く子どももいていいし、図書館に行く子どももいていいし、スポーツクラブで体を鍛える子どももいていいみたいにしろ」って。

最初に言われた時には全然私もドメスティックなものですから、外国のことあまり知らない。でもなんとなくヨーロッパ的なことをやれと言ってるのかなと思っただけで、それはいくらなんでもそんなことやってたら、それはまだ無理ですよ、とか言っていた。のちに再調査という二一世紀型学力テスト「PISA」で一番になって、世界を驚かせたフィンランドがそれを徹底して、七〇年代からそっちの方向へ向いていって。フィンランドが一番になったからというときに、日本ではちよつと後の話ですけど「ゆとり教育批判の時期」、学力低下だと大騒ぎしてるから一番になったフィンランドとこ見に行つた。どれだけ勉強しているんだろうとかいって視察団がわんわん行つたら、日本より授業時間が少なくて教科書が薄っぺらでみたいな話になつて。

「理由は何かと言われれば」つまり、フィンランドは学

習社会になつてからです。私が経済同友会の話のれなかつたのは、日本の子どもを午前中だけ学校と言つたら午後、学習しないだろうと。まだ学習する習慣がついてないのに、午前中だけでリリースするわけにはいかんよね、と。フィンランドに人に私も後年、「なんで午後からやるんですかね」と聞いたら、「それは大人が学んでいるからだよ」。なるほどね。親だつて周りの大人だつて、大学院に行つたり、いろんなこと研究したりしているわけだから、子どももおのずと学ばわ

け。  
それはますます日本じゃ無理ですね。日本で学んでいることなんて、特に親世代ぐらいの年齢の人なんてのは「仕事に追いまくられていて『学ぶなんて』それどころじゃないよね」みたいなことだつた。この時代はまだそれでも良かったんですね。

### 『分数ができない大学生』

このあたりからすごく怪しいことになってきました。まず大変だつたんですよ。旧帝大の人たちからガンガン言われて。京大からは『分数ができない大学生』岡

部恒治・西村和雄・戸瀬信之編（一九九九）『分数がでない大学生——二世紀の日本が危ない』東洋経済新報社が出版された。京大の経済学部が分数がでないという本が、すごいセンサーショナルな話題になりまして、のちにあれは経済産業省「当時は通産省」が後ろについていたということが露見してしまったりするわけですけどね。

経済産業省ってすごいですよ、身内でもなんでも、経済産業省は国立大学が独法化になる瞬間に、全部自分たちの領土にしようと思っていたんですよ。国立だから文部省の下にいるのはしようがないけどさ、大学を全部自分の支配下におさめて産学協働でガンガンやっちゃいましょうと思っていたので、ですね。要するに「文部省の下なんかいると子供が馬鹿になるよキャンペーン」というのをやらなきゃいけないということで、一部の大学の先生に研究費を渡して、そういうことを研究してくれみたいなことを言ったらしいんで、そのおかげで出てきて一。

「寺脇はゆとり教育批判の背景には経済産業省（当時の

本当にそうだったんですかね。聞きたいです。京大経済学部の学生が二分の一十三分の一という計算ができなかったんですかね、本当に。私の推測では、私の知る、この「昔からの伝統をもつ、東大なんかとは違う」と言っている京大の学生のことから、経済学の先生に授業でこの問題を解けと言われたらバカバカしいから、二分の一十三分の一五分の二つてみんなで書こうぜとか言ってやったのが、よっぽど京大生の健全な姿だと私は推測するわけです。いやあ、「京大の学生が二分の一十三分の一ができない。二分の一十三分の一がでなくても入れる入試をやっている」というこ

通産省）の影響を様々な場面で指摘している。たとえば、神保哲生・宮台真司ら（二〇〇八）『教育をめぐる虚構と真実』春秋社所収、寺脇インタビュー参考。寺脇の指摘は『分数がでない大学生』の編著者、数学者の浪川、教育社会学者でその後、「学力低下論争」を展開する荻谷剛彦らが参加した「グローバル市場競争時代における教育・人材育成のあり方」研究委員会（経済産業省所管地球産業文化研究所内）を指すと思われる。

となのだろうか」とかいろいろ思ったんだけども、あるとき、京大は大アウェイ集団なわけですよ。

### 数学者からの非難

今度は名古屋大の先生が来て、日本数学会の会長の方がちょうど名古屋大の先生で「浪川幸彦（日本数学会理事長、一九九七・一九九九）、「数学の時間を減らしてなんか総合とかなんとか」総合的な学習の時間を」やるのは何事だ」みたいな話になっちゃって。「数学の時間を減らすと日本の子どもたちの数学力が減びる」という。

私は、「もちろん、さつき誰でも大学の先生になれる」と言いました。私ももちろん学士号しか持っていないんで、昔だったら大学教授なんてなれるはずがないんですけどね。生涯学習時代になって規制緩和というか、規制緩和とはあまり好きな言葉じゃないですけど、「いつでもどこでも誰でも学べるんだから誰でも教えてもいいんじゃないの」みたいな話になったので、「私も大

学教授に」なれているわけですから、東大や京大という権威でこう言われても「無学者論に負けず」というや

つで、「京大でどうしてそれができないんですか」とか言い返してるし、「数学の時間が五時間から四時間になって、えらいことだ」と言うから、「では先生にお尋ねしますが、数学の時間を週十時間にしたらどのようなことが起こるでしょうか」と聞きました。「浪川先生は」正直な先生でね、「数学が死ぬほど嫌いな子どもが増えるだろうな」。「よくお分かりです」と。

つまり我々がやろうとしているのは、それを好きにして、細く長く、その瞬間五、六時間やるのでなく生涯にわたってやっていくということが大事で。いまあれじゃないですか、学校の授業時間で一番多いのは数学ですよ。一番少ないのが音楽とか美術ですよ。人間の一生にわたって一番それに時間を費やすのは数学でしょうか、音楽や美術でしょうか。みたいなことを言ってたわけです。つまりそのことについて興味さえもってれば、長い八十、九十年人生もってるんだから「それを」やるでしょうよ、本当に必要だったらあれするでしょうよ、必要なときに学ぶわけでしょうよ。

## 呆れた「元素率周期表」報道

一番呆れ返っちゃったのは、メディアの皆さんも偏差値秀才が多いもんだからとんでもないことを言うてるわけですよ。いつとき、この二〇〇三年の指導要領で、中学校で元素率周期表を必修にしないようになったわけですね。元素率周期表は覚えなくてもいいと。

覚えなくてもいいに決まっていますよ。私は絶対こんなもの覚えるもんかと思ってる覚えなかったですけど、一応六十何年生きてこられるんで。そんなこと言ってる元素率周期表はいらんと言ったら、また「脱ゆとり」、「反ゆとり騒ぎ」がこのへんでがーっと起こっていくんで、次の二〇一二年指導要領では元素率周期表はまた覚えなきゃいけないことになってしまったわけですね。かわいそうにな、またこれで苦しむ中学生がいるんだよな。あんなものすべての子が覚えなくてもいいじゃないかと思ってるわけです。

そしたら新聞に「えらいことが起こった」って記事が載っていて。元素率周期表が復活したこの年、この元素率周期表を習わなかった世代が、大学を卒業して

理科の先生になる。その人が教えられるだろうか。「馬鹿か、死ぬよ」みたいな話ですよ。理科の先生になろうっていう人がね、中学校で元素率周期表を仮に覚えなかったとしたって、高校か大学でそれをやってなきゃ理科の先生になれませんがね。つまり人間は必要に応じて学んでいくことがわかんないで、その瞬間それを学んだら、絶対それが剥落せずに「いるというわけです」。全然矛盾しているじゃないですか。二分の一十三分の一」という問題を「京大生が小学生のときできなかったはずはないのに、それが大学生になつてできなくなっているってするんだったら、そういうことを学ぶことに意味がないって言ってるような話になつていつていますよね。

で、とうとうですね、私すっかり忘れていたらこのあいだ古い教育関係の記者が「あんとときはすごかったよね」とか言ってる「なんでしたっけ」って聞いたら、結局なんだかんだ言ってるという大学の先生たちからつるしあげられる会というのが東大であったんですよ。私一人だけ呼ばれて行って、こっち側に二〇〇人くらい理数系の有名大学の先生たちがだーつといて、「理科

を減らすのはけしからん」、「数学を減らすのはけしからん」、「総合学習なんとか」っていうのがあって、すっかり忘れていたけど「よくあれ一人でみんなから、ばーばー言われてやっていたね」って「記者が」言うから、「いや本当に無学者者っていうのは恐いですよね、なまじ学があるとやっぱり自分より格の高い先生にはびびるんだけど、どうせ学がないから一休さんのとんちみたいなことを言っていたな」って、それくらいのアウエイ感がありました。

### ノリの悪い京大生

実はさつき大野先生からちよつとね、きついことを言われましてですね。「なんかお前の本を読んでいたら、京都造形芸術大学のほうが京都大学よりいいと書いてあったぞ」というふうな話があった。

——（大野）いやいや、そんなこと言っていない。京大でもええ子がいると。

いやいや、そういうアウエイ感があったのと、もち

ろん京大のほうが賢い子が来ていらっしやるのはわかる。私がいい大学の基準っていうのが、学習者にとつて心地よい空間であるかどうかというようなことからすると、いやいや最近京大もどんどん変わってきていると思うんですけどもね。

私、恐れ多くも、二〇〇八年度前期、京都大学で中期授業をもたして頂いたりしたもんですからですね。その頃の話ですけどね。

結局聞かれるんですよ。京都造形芸術大学なんて誰も知らんでしょう。京都はともかくですよ、東京なんかで話すと必ず聞かれるのは、「それ京都のどこにあるんですか」って言うから、「京大のすぐ近くですよ」「あ、京大の近くね」というふうに言われるわけですよ。「京大から一番近いところにある大学です」なんて。「京大のどのへんにあるんですか」ってなると面倒くさくなつて「京大からどつちかなあ。京大の東の北、京都は基盤になつているからね」。じゃあなんですか…、こういうことですよ。「天才バカボン知っていますか？ バカボンのパパの出ている大学って大学の名前知っていますか？」結構知っているでしょう、「バカ田大学」

っていうんですよね。バカ田大学がどこにあるかというのと、「都の西北、早稲田隣」にあるってのがバカ田大学の校歌でバカボンのパパがすぐ歌いますからね。

「うちの大学はですね、京都の東北、京大の隣にあるバカ田芸術大学でござんす」って言って「愛すべきバカが集まつてる集団なんです」なんて言って説明をしているんですね。いやいや、私の基準が偏向しているもんですから、それは京大よりいいってのはもの笑いの種になるのは当たり前なんです。

ただね、その京大で授業していたときに、午後の最初の授業が終わると、うちの大学に歩いて行って、うちの大学で授業するんですね。こっちでは偉い賢い方々ですよ、文学部の大学院生みたいな人たち。あっち行くとうちの映画学科の学部生たちですね。でも大体私が講義するのはヨタ話しかないもんですからね、ヨタ話がそんなにいろいろあるわけでもないし。その日、思ったこととか、その週起こったこととか、つまりいまの世界や日本がどう動いているのかということのなかから話をしていくんで、大体同じ話をするわけですよ、同じ日に行つて、こことここで作る

わけですね。そのときやった講義が本になるんですけどもね、『百マス計算でバカになる』(二〇〇九年、光文社)という本なんですけれども。百マス計算<sup>二</sup>をやる<sup>と賢くなる</sup>というのは本当なのかどうかということを考えてみよう、あの頃、百マス計算は大ベストセラ―で、親はこぞつて買つて子供にやらせる、学校でもやらせるつてして、これやればすべての子供が賢くなる<sup>と</sup>というのは正しいだろうか、というような話をしてたわけです。

それがですね、申し訳ないですけど、京大の学生さんで、こう、なんて言ったらいいのかな。……ノリが悪いです。「なんだよ」その「反応」とかって思う。それでうちの大学で同じ話すると、すごいみんなノつち

---

<sup>二</sup>百マス計算は縦横十マスの方眼上で簡単な計算を行う学習法。岸本裕史が考案者とされるが、寺脇の指摘するのは二〇〇〇年代に陰山英男が流行させたもの。陰山は現場の教員から公募校長、有名私立大学付属校の校長、同大学の教授、教育再生会議委員へと教育現場からめぐるめく出世をした人物。



やって、授業終わると学生来て「いまの面白かったよ」  
みたいに話で言ってくるから、おお、こっちのほうが  
よっぽどやり応えがあるなとかね。

### 現場に向く京造生

それから、いや京大にもね、その頃京大の学生たち  
と個人的に付き合っていたんですけども、京大の学生  
たちが来て「自分たちは学校、教育について考えてい  
るんで、学校に行きたい」と。学校とは小学校とか中  
学校とかそういうところに入ってやっていきたいと。い  
ま私が関わっている「カタリバ」という活動なんかは  
大学生たちが高校に行つて、高校生たちと話しするわ  
けですけど、そういうことをやってみたいと思うのは  
大体いるんですよ。それをちゃんと組織にしてやって  
いくのがそんなにないだけの話でね。だから京大の学  
生たちで、それがやりたい来た。「やればいいじゃない  
か」と言うのと、「誰もそんなことをやる人はいない」。

近いですからね、ここ「京都大学」も、うち「京都造形  
芸術大学」も、その北白川の校区なんですよ。ちょ  
うどその頃、北白川小学校から、あそこも総合に一生

懸命取り組んでるので研究発表会に来てくれて  
「お願いがあつて」。私その研究発表会に行つたら、「い  
いですね、それこそ探究型学習の努力をされています  
ね。しかも総合学習の時間だけじゃなしに、理科の時  
間とか社会の時間もそういうふうにやろうとしていま  
すね」つて言っていたら、終わつたら校長先生が、「い  
やー、おたくの学生さんにえらいお世話になつてい  
るんですよ」つて。「うちの学校に」来て、いろいろな授  
業してくれたりやつてくれたりしているんですよ、こ  
れ見てくださいよ」つて。

体育館のガラスが全部スタンドグラスになっちゃつ  
ているわけ。「これはね、おたくの学生さんとうちの生  
徒児童たちが一緒にやつて、ただのガラスをスタンド  
ガラスにしたんですよ」つて言っている。うちの大学  
の学生はこうやつて地域の小学校でこれをやつてるけ  
ど、「京大の学生はこういうとこ来ますかね」とか言つ  
たら、「いや一度も来たことがあります」。「じゃうち  
のほうがいいじゃん」というふうには私の勝手な尺度で  
そう思っているんで。そういうのはね、あの人が好き  
つていうときに、その好きつてのは好きの基準で言っ

てるんだから言わせてくれよみたいな、基準の話なんです。要は、その自分の学び舎だけにいるというのは、結局さっきの三要素の中の「学ぶ」ということしかやっていないじゃないですか。それは「働くということ」、「生きるということ」と結びついていかなければいけない、ということだと思っんです。もちろんそれは六、七年も前の話です。

## 時代の変化

この六、七年のまた世の中の変わり方はすごいから、やっぱり東日本大震災というのは若者の考え方を大きく変化させている。あれはやっぱり私らみたいにな、もう六十近くになつてああいふ大震災があつてもあまり驚かないというか、心が動かないというか、人生観が変わつたりはなかなかしない。「でも」、あれが多感な中学生、高校生、大学生くらいのとときに起こると相当考え方が変わってくるというようなことがあると思う。それから世の中は、じつはバブルがあつて、バブルがはじけた反省の時期に、阪神大震災とか地下鉄サリン事件とかあつたりした時期があつただけで、また

この辺から新自由主義経済から、「日本は」また大国になると思つて、金融資本主義、新自由主義つていうのが出て来て小泉さんが豊かになるぞみたいなことを言った時期から、またこつちのほうにきちゃつてた。でもそれも結局二〇〇八年のリーマンショックでそんなの無理だとわかつたところへ、大震災と原発事故ですからですね。このリーマンショックが二〇〇八年でしたっけ、そこらへんから二〇一一年の震災があつてみたいな時期で。

私はこの五、六年見ると全然違うなど、だから私が国賊と言われていた時期というのは「二〇〇〇年代前半」のところなんです。だんだん言われる度合いが少なくなつてきちゃつて。

そしていま、驚きますね。文部科学省がそれこそスローガンを作つていろいろ言つていますよね。たとえば「スーパーサイエンスハイスクール」なんていうのも文科省が作ったスローガンですよ。「スーパーサイエンスハイスクール」で学力上げるつて、それはこの頃「二〇〇〇年代前半」言つた話で。「学力低下でどうしようもないから『スーパーサイエンススクール』で学力

あげる」。……と言ったら理科の受験勉強する学校にはなっていないじゃないですか。

今日そこで発表している子たちって「スーパーサイエンスハイスクール」の子たちですよ。結局、「スーパーサイエンスハイスクール」で何をやるかって言ったら、そこでただ受験勉強やつてるんだったら、「スーパーサイエンスハイスクール」も受験進学校も変わらせないじゃないかという話になるから、やっぱり先生たちも真面目に考えてやっていけば、探究型のほうにやっていかざるを得ないですけどね。もっとすごいのは、いまのほら、これいいんですかね。政治的に偏向した発言もいいんですよね、大学だから。

この頃、ゆとりはけしからんと言っていた人たちが一回没落というか政権交代があつて、もう一回ここに來ているわけですよ、同じことやっている。同じ人「安倍晋三が総理大臣やつているし、その懐刀としてゆとり教育はけしからんと言っていた人」下村博文が文部科学大臣にいまなっているわけだからね。やっている人は同じなんです。やっている人は同じなのに、あの人たちがこのとき言っていたことは明らかに、ゆと

り教育というか二〇〇二年からやろうとしていたことを全否定。まあ全否定までもできなかったですね、全否定までは彼らもしてない。方向は悪くないけどいろいろやり方が悪いからどうのこうのって言っていたんですね。

すべては三十年前から

また、いま「教育再生実行会議」とかいつて。あそこからいろんな出てくるじゃないですか。たしかにその中から「道徳を教科にしろ」とか、「領土の問題をきちんと教える」とか、あの人たちが好きそうなことも出てくるけど。「あれ？」というようなこと結構出てきますよね。「一点刻みの大学入試をやめて、人間としての力を見る」とかですね、「アクティブラーニング」とか言っておりますね。なんだよって思うけれど、つまりただ受動的な学びではいかんと。ラーニングというのは学習ですからね。あれだけ教育という言葉が好きな方々までアクティブラーニングというふうになんてやっています。一方で「キャリア教育ちゃんとしてやっっていけ」なんて言っています。いまやその文部科学省の文

章なんか見ると、キャリア教育、アクティブラーニング、大学入試を、センター試験の一点刻みをやめる。それから「インターナショナルバカロレア」、「IBスクールになれよ」みたいな話なんですよ。

私ももう現役を退いていますし、なんだかよくわからないから、そんなわけのわからない言葉が出てくるといったそれはなんなんだろうと思って調べる、勉強するわけですけどね。その「キャリア教育」の定義というのが文科省のホームページに書いてあるんですけど——これがなぜかね、非常に読みにくくわかりにくく書かれているんですけど、読んでみるとですね、画面上の表示がですよ。なんかもうママコみたいにわけのわからない表示にしていますけど、そこへ辿り着いてちゃんと読みにくいのを読んでみると——もうそこに書いてあることは、どう考えてもゆとり教育と同じことしか書いてない、って思うわけです。

アクティブラーニングというのをどうするかっていったら、どうみたって総合的な学習【の時間】でしかないと思っていれば、「アクティブラーニングは総合的な【学習】の時間にやるんだ」って文科省から発表されて

いましたよね。またなんか今度の指導要領の改定では総合学習の時間を増やさなきゃいかんわな、みたいな話になっている。

インターナショナルバカロレアってやつもよくわからないから、いったいどんな学校目指してんのって聞いたら、「受験進学校じゃなくっているんな体験をして、生徒が自主的に自分が何を学ぶかということを決めていく」。「え？ そんなの二十年前に作った総合学科高校のことじゃないんですか」って思うわけです。

### 「この道はいつかきた道」

全部「この道はいつかきた道みたいなことをまた言ってるのかよ」って思ったんで、実はここだけの話、公にはじめて言いますが、これからもどんどん言っちゃいますけど。先週その高校生たちが来たんで、前川文部科学審議官と会ったときにね、いまから私がやる質問にイエスカノーで答えてください。それを記録しておくと「高校生たちに言ったんです」。

「キャリア教育とゆとり教育は違う、○ですか×ですか」

——「○です」

「アクティブラーニングは総合的学習一生涯命やってくということですよ。○ですか×ですか」

——「○です」

「インターナショナルバカロレアスクール」というのは、総合学科は残念ながら二〇年経つても全体の五%ぐらいにしかいかないし、いわゆる昔の実業系高校を改組するみたいな考え方になっています。ただ、いまこの「地域創生」とかなんとか慌てて「政府が」言い出しましたけど、町が消滅するとか言い出しましたけども、いま本当に地域に、地方の総合学科高校の卒業生って本当に地域に根差して生きているっていうのが、開設して二十年くらい経つと、「卒業生たちどうしているんですか」って「聞けば」、「みんなほとんど地元になりますよ」みたいな言い方をされる。そういう役割を果たしているけど、たしかに進学生はそういうところには行かない。

でもそれをインターナショナルバカロレアスクールになりなさいと。あるいはコミュニティスクールになんて言っているんだって「いうわけです」。地域と結び

ついて学校が閉ざされた牙城であつてはならないみたいなこと言っているんですよ。それをちゃんと大臣も言っているわけ。

いったいどうなっているの。みんな現場だけが混乱しているんですよ。ゆとり教育だつて言っているから、今度はそれはやるなど言ったら、今度はキャリア教育だつて言つて。よく調べてみたらこれまたゆとり教育と同じじゃない。言わば右へ行けて言ったらまた左行けて言う。左行つてみたら右へ行けみたいに言われて、現場は混乱して疲弊して嫌になっちゃつて、元気をなくしていく一方なんですけど。

要はなんでこうなっちゃうのか。それはやっぱり、このとき、ガリガリの人たちだつて「ゆとり教育者を指しているのか?」、「こうしなきゃいけない」「ゆとり教育の方向性にはいかないといけない」って思うのは、それは世界がそっちの方向に動いているわけでしょう、つていうふうには思わざるにえないじゃないですか。

なので、私も現場の人たちをなぐさめるときには「もうしようがないよね、そういうときには右行つたり左行つたりある程度はするんだよ。でもそれが段々おさ

まってきたらどっちのほうにいくかというのは、歴史的必然みたいなものではないか」というふうに思います。

### 「なんちゃってAO入試」

だって本当に大学も本当に変化してきてると思えますよ。東大はAO入試を入れるなんていうのはびっくり仰天ですけどね<sup>三</sup>。でもあれは世の中でなんて言われているか知っていますか。世の中とか我々の間で。「なんちゃってAO入試」というのは「こういう表現は」年配の方はよくわかるんですよ。若い人に通じるのは、「AO入試（笑）」。

みんな思ってますよ。「あれはAO入試じゃないよ」って思っていますから。東大の今度やるやつは。あれ  
三二〇一五年三月現在、東京大学がホームページで公開している情報によれば、学校長による推薦が必須であり、推薦には高校での成績などが必要の場合があり、各種コンテストでの入賞実績の提出などがある。

### 【別紙】平成二八年度推薦入試について（更新）

<http://www.u-tokyo.ac.jp/content/400010427.pdf>

はAO入試ではないですよ。ああいうのを「推薦入試」っていうんですよ。校長が推薦したやつしか受けられない。自由に受けられない

さすがに京大はそんなばかな事にはなっていない方向のようですが、大丈夫ですか、みたいなことですけどね。天下の東大がAO入試を。当然この流れは「入試に」AO入試」を導入してきた九〇年代以降」の流れなんです。なのでAO入試をSFC「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス」が最初に本格的にはじめたのが一九九〇年代はじめじゃないですか。それが出てきたときに、あれもいろいろ話題になりましたけども、私は、あ、これはもうこれからの時代を先取りした入試だな、すごいな、私立だからできるんだよね。これからは国立もそういうのやっつかなかないからねっていうふうに思っ、中教審でも議論してAO入試を国立にも取り入れようというんだけども、全然、前に進まないですよ。

### 仲居になったAO生

東北大学がひところ取り入れていって。九州大学の

「二十一世紀入試」なんていうのはね、あれは面白い結果が出るなと思いましたよ。このあいだ湯布院に行つて、毎年、湯布院映画祭というのが夏にあるんですから、毎年行つてるんです。湯布院に行ったら、ちようど私たちの世話というか、私ゲストで行つてるので、私たちを案内というか、アテンドしてくれる若い女性がいて、「あなた何してるの？」と言つたら、「この温泉旅館の従業員です」つて言うわけ。旅館の従業員の人も映画好きだったりすると、ボランティアでこういうことやつてるのかなつて思つてたわけですよ。

彼女は「九大の二十一世紀枠の卒業生なんですよ」つて言うから、九大の二十一世紀枠で学んだ人がどうして旅館の仲居をしてるんだらうつて思うじゃないですか。別に仲居が悪いわけじゃないけども意外だったから聞いたら、「いやいや、学生のときにフィールドワークで湯布院にきて、湯布院の地域が、田舎が過疎化だ高齢化だつて言つてるときに、元気な自治体としてやつている」と。「それでフィールドワークで研究したので、九大からここへ先生と一緒に来て、研究した」と。「だけどやっぱりにここに住みついてみて、ここで働い

てみないとわからないと思つたので、何年かここで働いてみて、またそれを研究にするんです」と。

そういう発想かと思つて、そういう発想の若者を育てているのか。やっぱり二十一世紀入試もよくわかんなかったけど、結果を見れば、それはわかつてくるね。取り入れたときはそれで大丈夫かつて、なんでも言われちゃうわけです。結局、結果物がでてこないといふ話にならないですよ。

### 選ばれなくなった東大

東大がAO入試を入れた理由というのは見え見えなんですけども、つまり私、高校生と付き合うでしょう。スパー高校生と言われる、ものすごい優秀な高校生がいるわけです。その連中と話していると意欲もあるし好奇心もあるし、そういう連中に付き合つてると東大に行きたいつていう奴いませんもん。大学が目指してるのつて聞くと東大つていうやつやつないんですよ、驚くべきことに。慶応とか早稲田とかICU「国際基督教大学」とか、あるいはハーバードとか言つて。この間の四月は私のまわりの子が二人、ダイレク

トにハーバードに行っちゃいましたけどですね。

「東大に行かない理由は大きく言えば二つあって、一つはつまんなさそうだと。あそこに行っても型にはめられてつまんなさそうだと。理系はともかくとしても、文系はつまんなさそうだって。つまないでしょうね。私の卒業した東京大学法学部なんか、四十年以上前に私が在学していた時と同じ授業のやり方でいまもやっているわけですから、私の時代でも退屈だったのに、いまの子どもがあんなのよく我慢しているなど。私立であんなことやったらすぐ潰れますよ。四〇〇人の一斉授業が毎回毎回続いていくなんていうようなことやったら、私立だったら一発でアウトなんでしょう、東大だから成り立ってやっているんじゃないですか、みたいに思うから行かない。

それともう一つは、AO入試というのは自分を評価してもらっているんですけど、東大は学力入試しかやらないから、あんなもので評価されるのは嫌だという連中がいたりするんですよ。一番有名な人は灘高時代から有名な、チョウ君といって、中国籍の子ですけ

どね。T e h u<sup>四</sup>という名前でネット上で有名ですけどね。T e h u君が高校三年生のときに、「東大なんか目をつむついても入れるけどあんなところに絶対行かねえ」ってネットで書いて大炎上するという事件があって、私のところに別の高校生が来て、「そういう奴がいるんですよ、寺脇さん会ってみたいと思いませんか」と「会ってみたいね。会って彼を呼んで高校生たちみんなで話そう」とか言ったら、「でもしようがないですよ。そもそも大学に行くことを認めてないんですよ。だって自分は今も中学時代から社長になって会社やっているし、もちろん学ぶ気持ちはあるけれども、学ぶってのいうのは自分がもういろんな人と逢ったり、自分で本を読んだりして学べるじゃないですか。でも、どうしても親が大学にだけは行って欲しくて泣いて頼むから、それなら一番自由度の高いS F Cに行くよう

四 一九九五年生まれ。灘高校に在籍中、開発したiPhoneのアプリケーション「健康計算機」がヒットし一躍有名に。その後、プログラマーを引退宣言し、多方面に活躍。



にしますよ」って言って吹いていたけど、すごかったですね。

このあいだ、彼がニコニコ動画かなにかで、彼卒業してしま大学一年生だけど、今年のセンター試験を皆の前で解くというのをやって、全問正解だったらしいからね。口だけではないということなんでしょう。でもそういう人間がもう明らかに「東大なんかに行かん」と言われちゃっているので、東大だって考えなきゃいけないってことになったんだろうけども、悲しいかな、たくさん受けに来られちゃ困るって意識があつて、校長先生が認めたやつじゃなきゃダメとか、なんかわけわからんことになって、共学の学校は二人いいけれども別枠の学校は一人じゃなきゃだめ、みたいなまたわけのわからんことを言ってる人数制限していくから。大體校長先生のお気に入りなんじゃ、しょうがないんじゃないのって思うので、みんな思ってるんですよ。あれはAO入試って言っているけど本物のAO入試じゃないよね。なので「笑」になってしまっているわけです。でも、それでも私もびつくりしましたよ、東大がAO入試をやる日がこんなに早くくるとは、とは思

いましたよ。

### 学習者主権の時代

でもそれは東大が変わったんじゃないかって、若者側が変えて行った、つまり来るものが来なくなっちゃった。東大ですらスルーされるっていうような状態が起こって、それでハーバードに行かれちゃったならなんの顔も立たないですよ。

つまり実は、これいまこういうこと言うのであればですけど、ちゃんと十年前から言っているものでどっかに記録に残っていると思えますが、それを狙っていたんですよ、ずっと。日本の教育を変えていくには「学習者本位」という考え方に変えるということではですよ。学習者本位にならなきゃいけないのに、学習者本位に一番ならないというのは、さっきも言った通り入学試験なんわけですよ。こればかりは学習者本位じゃなくて教育者本位の問題だった。だからその一点刻みをやめろって言っているのなんか「は」より学習者本位のほうに変えなさいと言っているわけですけど、そうならざるを得なくするようにするには、学習者の側が、国民

がね、日本国憲法を得て、国民主権と言ったときに主権者としての意識がなければ民主主義なんかすぐ壊れちゃいます。

選挙に五十二%しか投票に行かなかったりしていた日には、国民主権というのもだめになってしまおうわけだから、「学習者主権」って言ったって本人が主権者意識を持たなきゃいけないわけですよ。それで営々と築いてきてやっと効果が出てきたなと思うのは、小学校から「あんたたちが学習者で主役なんですよ」ということを言っていき小中高とやっていけば、大学に行くときに「なんで俺がお前の言うとおりに入らなきゃいけないんだよ」みたいなのが出てくる日がくると思っ

ていたなら、「ここに来てそれが」来た。  
ようやくその日が来たな、いいぞ。だっていまの高校三年生って二〇〇三年に小学校に入った組だし、もうゆとり教育がはじまったとき以来、どっぷりそれにつかってくる申し子の子どもたちですよ。いまの高三代、やったねっていうふう思う。あるいは去年の高三代もダイレクトにハーバードに行くなんていうことがはじまったのか、みたいなことで衝撃を与

えてくれたんで。全国で五人くらい行ったらしいですけどね。とうとうそんなのが出てきちゃったかみたいな話。その一、二年前にはまだ私が聞いたのは、保険のために東大に入るといふ学生が出てきたっていうのは驚いた。「どうするの」って聞いたら、「いや私はアメリカの大学に行くんですよ。でも途中で病気になっちゃったりしたときの保険のために東大にも一応入っています。東大には入るんだけど東大には一時間も授業聞く気はなくて、東大に学籍だけおいといてすぐ向こうに休学して行っちゃうんです」。一応、安全弁をもっとかなきゃいけないからねって言ったら、もうそれすら持たずに行く連中が出てきた。

自分が学ぶ、自分がやりたいところで学ぶ。世の中でここがいいんだとか親がどう言ったから、そういう話じゃないんだという連中を、小学校から育てていこうという遠大な計画が、実を結びはじめているなどいうことなんです。これ私ずつと役所にいるとき「八十年代頃」から言っていたんですね。

### 「人間をひとつの流れでみていく」生涯学習

よく言われるじゃないですか。日本の教育を変えるには大学を変えなきゃいけない。大学が変われば高校が変わる。大学入試が変わるから高校が変わる。高校が変われば高校入試が変わるから中学が変わる、という言い方をしている。大学入試を変えないかぎり日本の教育はよくならないってずっと言われてきたんです。私が役所に入ったときからずっと先輩たちが言っていた。私はそのとき思っただけです。なんかこの話は変だな。だから大学を変えればってことで、共通一次試験、それからセンター試験、大学に改革を命じて大学改革をなんとか、大学改革、大学改革って言うわけです。私も高等教育局で仕事はしませんでしたから、大学改革いいけどねって。いいけど教養部なくせ、なくしたら日本の教育がよくなるとは思わんけど、なによつていうふうに思っていた。

大学改革ほど無意味なこと、無意味というか、やりがいのない仕事はないですよ。だって言うこと聞かないですもん、最終的には。大学の自治じゃって言って、居直られてしまったら全然ダメな世界。その点小

学校なんかは、文部省がこうするって言ったらやりましょうってみんなやってくれるからね。

ここから変えていかなきゃダメだよ。一番素直なのは小学校の先生で、次が中学校で、高校、大学と段々こう言うこと聞かなくなる。言うこと聞かなくなるというか、新しいことを言っても、えーそんなこと言っても……って言うわけだから、素直なところから変えていきやすいんだ。それで順に考えたって、まずは最初に入るのが小学校なんだからそこからやっつけてかなきゃいけない。

つまり生涯学習という考え方はですね、人間をひとつの流れでみていくということです。一人の人間が十歳から八十歳まで生きることを想定していかなきゃいけない。そこまで言わなくなつたって、一人の人間が学校教育を六歳から二二歳まで受ける、という流れのなかでそれはどういう部分なんだろうかというふうに考えていかなきゃいけないのを、なんかこうダルマ落としてみたいに、小学校の上に中学校が乗って、中学の上に高校が乗って、高校の上に大学が乗って……こうなっていますって話じゃなくて、それは一本、芯

がとおってる学習者の側から言えば関係ないよ。

学校すら関係なくって、フリースクールだっていいじゃんか、とか。高校中退だってあと大学入学資格をとるための高卒認定試験受けたら、また入ってくればいいじゃないか。なんでもありみたいにしていてるわけなんで、学習者の側に目を向けたいでしょうがないですね。

### 「地元の子どもが行く学校」

高校だってそうなんです。僻地の高校ってだんだん子供の数が少なくなってる潰されていくわけです。私も全国見ていると、単純につぶれる高校ってのが当然多いですよ。子どもの数が少ないんで入学者が少ないという要素とですね「他にもあるんです」、それだけでは潰れないなかなか高校は。それよりもそうやっていく過程の中で、交通がどんどん便利になっていくので、その高校がある町の子どもは都会のほうの高校に行っちゃって、都会の高校で行き場のない子どもがここにきちゃうという状態が起こってしまうと、もう高校は潰れるっていうのがくるわけです。

大阪に能勢町というところがあって、有名な能勢高校があるんです。有名なというのは私でも知ってるくらいの高校があつたっていうのは、昔、高校が偏差値輪切りで斬られたときに、大阪府の偏差値輪切りで一番偏差値の低いところにある高校ってことで有名だったんですね。それこそ二、三十年前から地元の子は偏差値の高いこっちの学校行って、大阪中のどこにも行けない子がそこに来ちゃうもんだから、それはあまり真面目に勉強もしない。よそ物の子供たちがその辺でタバコ吸っているなんて言ってる嫌がられる。でもその能勢高校っていま、まだ定員割れしてますけど見事に存続している。どうしてかっていうと、それを残すために能勢町がなにをやったかというところ、小中高一貫教育という考え方を打ち出していった。もちろん学校は別ですよ、一貫校にするわけじゃないですよ、一貫教育ですから六校の小学校、二校の中学校、一校の府立高校があるんですね。だから教員の研修会というのは、町立小学校や町立中学校の先生と府立高校の先生が一緒になんでもやっついていって、町立府立の垣根を越えてそこでやっついていく。そして子どもたちの一二年間を見

ていくという考え方の中で、地元の子どもが行く学校にしていこうじゃないかというんで、取り組んだ結果です。まだちゃんと存続している。

ああいう感じの高校はいまほとんどなくなっていく最中にね。つまりそれは学校側の都合じゃなくて、そこに生まれ育った子、能勢の町に生まれ育って六歳になって能勢の小学校にきた子どもを、ここで高校まで全うさせてやるためにはどうしたらいいのか。彼らが学びたいこと、町の学校に行かないかや学べないということだったら困るよね。だから能勢高校は総合学科の高校にして、要するにいろんなレベルの子どもに対応できるようにしているわけですよ。ユネスコスクールになっっていますから、英語を一生懸命、国際的な勉強をしようという子どもにはそれに対応する。それから昔、農業学科があった時代の名残で農業を学ぼうという子はそこで学べる。障害をもった子供も地元の高校で学べるようにもっていくとかね。そういうふうに一歩ひとりと見えていかなきゃいけない。

### 学級規模論争の欺瞞

「教育」ということを父親の敵みたいにいまは言っていますけども、「教育」だって悪いわけではないです。ね。「教育」というのは近代においてはものすごい効果を發揮したものです。近代においては「教育」とは輝くような言葉だったと思いますよ。明治時代になって学校教育、さらさら光るようなものだったんです、それはもうしょうがない。

この間も財務省が、三五人学級はけしからんから四〇人学級に戻せと言ったとかいうんで大騒動になって結局、財務相も引き下がったわけで、僕らからしたら財務省主計局も落ちぶれたもんだと。落ちぶれたというの、引き下がったのが落ちぶれたんじゃない、そんなチマチマくだらないことまで考えなきゃいけなくなっただけ。天下国家を論じてね、昭和の三大バカ査定とかって言って、「新幹線なんてつくるのはバカだ」というふうに言ってたところがね、それくらいのこと言いなよって。

だから私も文科省に味方して、「そんなこと言うのバカバカしいよ」、なんて話をほうぼうに書いてたり喋った

りました。でも考えてみたらね、「前々から嫌いなんでね」って文科省の人に言つて、「三五人とか四十人学級という言い方やめなよ」。あれはひとつの学級、教室に何人詰め込むかっていう話でしょう。明治以来どんどん減つてはきているわけですよ。八十人くらい入れていた時期だつてもちろんあるわけだ。それは近代化の中での論理でしかないんですよ。軍隊の一個小隊を何人で編成するかみたいな話、学級編成なんという考え方がもう全然だめなの。

同じことをつまり発想を変えて、子ども一人あたりどれだけの先生が手をかけてるか、どれだけの先生が関与すべきかみたいな算定方法に変えていかないと、発想がそもそも「四十人学級を三十五人学級にしてやつたから有り難いだらう」みたいなことを言つてるのはおかしいよね。しかもそれ画一的でしょう。人数が減つたら有り難いと思つて言つても、体育の時間なんか人数減つたらつまんないし、みたいなこともあるのに、とにかく学級人数が減つたらお前たち嬉しいだらう。「ウンだよ、先生が教育するとき都合いいからでしょ」ってみんなは思つてしまうわけで、「教育するた

め」だ。

だから教室つて言葉も学習室に変えて言えばだんだんわかるんだよね。教室つて教える部屋。戦前は「教場」とかいつて、もつと教える側の論理ですよ。だから全部教える側の論理は文部省だけが悪いんじゃないですよ。日教祖だつて同じことですよ。「子どもの数を減らせ」つてじゃなくて、「一学級で俺たちが教えないじゃない人の数を減らせ」つて話だし。むかし日教祖と文部省が激しく争つていたところに、教壇をなくすつて話が出てたじゃないですか。「先生と生徒は対等だから教壇をなくす。壇の上に立つて教えるのはけしからん」つて言うけど、誰だつて高いところに立つて話したほうがよく見えるからいいじゃないのつて思わないのかなと思うわけですよ。一番後ろの子なんかできるだけ先生高いところで話してもらつたほうが先生の顔が見れていいだらうつてだけの話ですよ。そういう発想法が右も左もそつち側の考え方。教育から学習へ。

## 大田堯<sup>五</sup>からの電話

実は今日ここに入る前に、せっかく先生に玄関まで迎えに来て頂いたにも関わらず、私は電話をかけていて、その電話の相手があまりにも偉い人なものですから、私もそこで「ははあ」と言つて、そのお方は、「君もいろいろ忙しくつて京都行ったり、さつきはすみません、新幹線の中で出れなかったもんですから言つて、忙しいようだけれぐれも体には気をつけてください」つて、九七歳の方に言われたんです。大田堯さんと言つて、もう大体ある年齢以上の人しか知らない伝説の教育学者ですよ。東京大学教育学部の学部長から都留文科大の学長を務められて、一貫して反権力、日教組の理論的支柱と言われた方が御年九七歳。今年九七歳になるのか。

今度一緒に本を出すことになっていましてね、その打ち合わせの電話だったんです。かたや文部省、かたや日教組の理論的支柱が同じことを考えている、みた

五 一九一八年生まれ。東京大学教授、都留文科大学学長を歴任。日教組など組合運動の理論的支柱たる人物。

いな本になつちやうわけですけどね。私なんか無学ですけども、正反対のあれだけの学問を持った方が、「学習だ」。あの先生、昭和二〇年代から「学習だ」つて言つて、いつから言い出したんだと。「あなただつて若い頃は———というか自分の頃は———学習なんて思わず教育つて思つていたんじゃないですか」つて。どこから思つたかつて、この間よく聞いたらね、「軍隊に行つてからだ」つて言っていましたね。

戦争に行つて、東大の大学院卒業したのに二等兵かなんかで戦争に行つて、船沈められちゃつて近くの島に泳ぎ着いて、物は流されちゃつてロビンソンクルーソーほどじゃないけど、そこで自活しなきゃいけなくなつたときに、自分が一番役に立たないつてことがわかつた。東大大学院卒の自分が全然役に立たず、同じ仲間の兵隊で漁師だつたやつとか農民だつたやつとか鍛冶屋さんだつたやつとかが、が———つてできるわけですよ。これか、学校でいくら学ぶつて言つたつて、学ぶことの意味はもろろあるけども、それがすべてでそれが偉いと思つていたのは、もうそこで打ち砕かれたなつていう話。しかも「お前、東大出だから」つて

いじめるわけでもなく、みんなで助け合って、まさに共生してやっていったわけでしょうね、「そこが原点なんだよ」ってこのあいだ言われて、戦後ずっとそうやってきた。実話だからね、私なんかは偉そうに言っているけど、このときくらいですよ。教育じゃなくて学習だっているのは。あちらはそのずっと前から言っている。

## 法廷での出会い

はじめにお目にかかったのはおそらく一九七七年頃、家永教科書裁判というのをやっていて、私は国側の代理人で被告席に座っていて、家永さんが原告で向こうにいて、東京高等裁判所。原告側の証人として大田都留文科大出廷をなす。その話を聞いてぶっとんじやったんですね。大田先生はね、「とにかく学習が大事なんだ。教育なんていうのは学習するためにあるものであって、教育などというものは主流ではない。学習ということだけを考えなければいけない」と、滔々と言われるわけです。

ところがその裁判はなにを争っているのかというと、

「教育権は国にあるのか教師にあるのか」ということを争っている。その不毛な争いですね。私も大学は教育学やってないですから、大学は法学部で政治学とか行政学を学んで文部省入ったら、いきなり日教組と対決しなきゃいけないから、「この教育権という本を読め」とかって。読んでいてなんか変なんですよ。「おかしいな。教育をする権利、そんなのどこにあるんだよ、憲法にも書いてないんじゃないの？」『教育を受ける権利』とは書いてあるけどね。つまりそれは学ぶ権利じゃないのかな」と。

教育を受ける権利なんて、なんでないものを国とあれが血みどろになって争っていると思っていると、大田さんがそういうふうに言われたからストンと腑に落ちて、もう弟子入りしようかと思っただけで、立場上なかなかそれはできずに。そして二人が引き裂かれですね、七十七年に一目出逢ったのにすれ違い引き裂かれ、私のほうもやつぱり学習だと思っただけなことをずっとやってきた。



### 「歴史的握手」

大田先生は私より三十年以上も歳上ですからね、早くにリタイア、現役は去られる。で、二人が再び巡り会うのがですね、それから三十年後。二〇〇九年くらいですかね。大田先生の「かすかな光へ」二〇一一年、森康行監督という、大田先生の人生を追ったドキュメンタリー映画で、それ観てびっくりして、まだご存命だったんだと思ったわけです、失礼ながら。もうこの頃あまりご拝見しないし、亡くなられたのかなと思っていたら、え、そうなんだ。その映画会社の人が、じやあこの映画の上映イベントがあるんで寺脇さん会いたいんだったら、そこに行つて大田さんと二人でトークしましよつて言つて。

それでお目にかかったのが、大田先生九四歳くらいのときかな。私はまだ五八、九くらいるとき。そのときに二人で壇上上がったら長生きする人はすごいですね。満場は大田ファンですよ、もちろん。私のファンなんかいない。大田信者がダーっと来てる。その大田信者の前で、私のところに来て「握手しよう」って言うんですよ。握手したら、こっちきてニヤつとして

### 「歴史的握手」つて。

それからおたくにお伺いしていろんな話を聞く。聞くんじやなくて、本来はこっちが学びに行かなくちゃいけないのに、向こうが「学ばせてくれ」つて言うわけですよ。俺は学びたい。なんなんだつて、つまり「あんたがいろいろこのへんでやってたことつていうのが俺はもうあんまりよくわかっていないんで、一体その『ゆとり教育』というのは何をやるうとして、どういうふうにやるうとしていたのか学ばせてくれ」と言うから、それを話しに行つて、当然先生のおっしゃることとはめっちゃめっちゃ私の学びになるんでね。その学び合いの場をずつともってきたので、それを二人だけで独占するのはもったいないと思つて、本にして今年中には出そうと。

### 「学習つてことがわからんのだよ」

今年中というか本当は今年のはじめに出そうとなつたけど、このところ体があんまり動かないんでというお話だったので、「先生いくらでもお待ちしますから」みたいなこと言つて。大田先生つて、それこそ私、無

学者だから、ずっと口先だけでなんでも生きてきたんで、大田先生の話聞くと、「あ、俺が口先で言ったことにはすべてこんな学問的な含蓄ある理屈があったんだ」ってよく分かって、「そんなんだったら文部省の顧問になってもらえばよかったよな」、なんて思うんですけどね。そんなこと絶対上が許してくれないし、自民党が許してくれないとは思いますが、という話ですよ。

だからいまでは「大田先生は」「日教組もけしからん、あいつらいまだに学習ってことがわからんのだよ」って言っておられましたけどね。例えばこういうことなんですよ。

これでゆとり教育で、「教育から学習へ」って言うでしょ。テレビなんかで言うわけですよ、みんなね、識者たるものが。つまり「子どもが自発的に勉強なんかするわけじゃないか」と。子供はびしびし叩いて、犬や猫みたいなもんだとまで渡辺昇一さん「英文学者で上智大学名誉教授。保守の論陣というよりも、曾野綾子と並ぶ「産経正論」路線の代表的論者はなんか言っていたけど、「子どもは犬みたいなんだからムチで叩かない限り学ばない」「自由にさせてやるなんて

やったら遊んでるだけで、学びやしない。人間は本来的にはそうやって厳しく鍛えない限り、学ぶということをしなないんだ」と言われるんで、私が言い返したのは、「そうですかね、もし本当にそうだったら子育てなんかすごく楽なんじゃないですかね。私の聞いたところでは、赤ん坊がいろんなもの飲み込んだりするのには、これはなんなんだろうと思ってこうやって飲み込んだりやうようなもんで、子どもが強制されないうりなにも学ばないんであったら、赤ん坊はただそこに座って、お腹がすいた時だけえーんって泣くから、ベビーサークルも必要ないし見ておく必要もなくなるんじゃないですか。ただベッドの上に置いとけばそうやってお腹すいた時だけぎゃあと言ふことなんじゃないですかね」とか言ってた。

それを大田先生の本を読んだり、先生の話の聞くと、それは人間というものの「真の人間とは学ぶ動物である」というところからはじめるわけです。それが動物と違ふところだ。自発的に自分の意思で学ぶということがあるんだと。それをうるさく言うもんだから、だんだん自発的に学ぶのが嫌になっちゃって、これをや

れあれをやれみたいな話になってきてるんだと。その時そう言ってもらえばよかったな、とか思うぐらいの話です。

## 2. 未来の学び——競争から共生へ

### 『成長の限界』を読む

さつき歴史的趨勢だと言いましたけれども、これは今日いらつしやつてる方はご存知かと思いますが、これも、一九七一年に私は大学に入るのでありますが、その年にローマクラブの『成長の限界』[一九七二年]というレポートが出たんです。出たといっても私は知らなかったですけどね。

成長の限界。つまりそれまで人類は成長し続けるというのに、はじめてそうはならないんじゃないかという未来予測が出されたわけです。幸い、私、大学三年になったときに、本校の法学部に進みますが、そんな四〇〇人の授業を受ける気はしないから、そういう時間は映画見たりマージャンしたりして過ごしているわけですけども、少人数が教えてくれるらしいんで、

そのゼミというやつに行くけど面白いかなと思って、それだけは学校に行くかと思つて。

最初に受けたゼミが憲法の小林直樹先生のゼミだったんですね。偉大な左翼ですからね。小林直樹先生のゼミというのは何やるんですかって言ったら、ガルブレイス[ジョン・ケネス・ガルブレイス]制度派経済学の学者の『軍産複合体』[邦訳『軍産体制論…いかにして軍部を抑えるか』]を読んで。この「軍産複合体」なんていうものをぶつつぶさないで、世界は平和にならないんだ。「あ、そういうこと勉強するのか」って思つていたら、ちょうどその年に『成長の限界』の日本語が出たもんですから、先生が今年はこれをテキストに使うおうつて。

そのテキストに使つて「ゼミを」やると非常に暗い、その当時の感覚で言えば非常に暗い未来が書かれてるわけですよ。二一世紀になると石油もなくなつてくるし、石油も石炭も有限なものである。したがつてどこかでなくなる。いまの調子で使い続けた日には二〇二〇年頃にはなくなつちまうんじゃないか、とか書いてあつたと思うけど、もちろんあの頃から公害問題と

かつて言われはじめていきましたから、環境問題だつて深刻な状態になつていく。それから人口もどんどん当然増え続けていって、それに見合う食糧生産ができるのかとか、とか暗い話ばかり書いてある。そういう時代を前提に未来を考えないと、二一世紀が、まあ僕らは鉄腕アトムで育つていまずから、鉄腕アトムの二一世紀つてすごいですからね。未来都市みたいなのが出て、いまぼくらの生活つてあんまり四十年前から画期的に変わったものつてのは携帯電話くらいじゃないかと思ふくらい、そんなに変わつてないですよ。着ているものも、建っているものもね。それがすごい未来があるよなんて言つていたのは嘘だよつてことがわかつちやつて。でも日本では、ちようど大阪で万博やつてる頃ですから、誰もそんなの信用しないですよね。

### 共生型社会とフィンランド

私も実は「さすがに、それは本当かな」とか思つて、日本も万博だしつて、実はすっかり忘れていました。でも、だんだんヨーロッパでは生涯学習というやつが出てきたぞつてこれくらいのとくにわかるわけですよ。

ね。ヨーロッパでは同じ一九七一年にユネスコでライフロング・ラーニングという考え方が提唱されていつて。要するに近代型の教育から、学習者が主体になつて自分に必要なものを学び続けていくかたちに変えていこう、ということだ。あとになつてみると、ヨーロッパも、つまりそういうレポートが出てみんな読んだつて、日本やアメリカは全然「そんなバカな」と思つているし、「ヨーロッパは日本やアメリカほど榮えてないから、そういうこともあるかもしれない」と思つたんだと思ふし。

ヨーロッパでも脱近代ができてないのが豊かな順にできてないので、イギリスとかフランスとかドイツは、すぐはそんなふうに切り替われなかつたけど、フィンランドとかオランダとかデンマークとか、あの辺はみんな切り替えが早かつたわけですよ。なので——PISAみたいな、「二十世紀型の学力」ではなくて、「二一世紀型の成長が見込めない時代の生き抜いていく共生型[学力]」——「競争から共生へ」つていうのもその流れなんですけども——共生型の社会に適した教育をしていこうといち早くやつたわけですよ。競争から

共生へというふうだね。

私は良く分かったんですよ。フィンランドがああのレストランで世界一番になったわけというのを。フィンランドまで行く時間も金もないもんですから、どこに聞きに行けば一番いいかわかるかと思って、東京にあるフィンランド大使館に行くと、大使が時間とってくださって——ある出版社が介在したこともあるんだけども——私フィンランドに行かなかったかわりに、フィンランドの古代史から全部教わって、フィンランドがどんな歴史を基にこんなふうになったかというふうに学んでいく。そしてフィンランドの政治や社会がどうなっているかを聞いていくなかで、やってきたわけです。

### 「二十二世紀の教育」を論じる子どもたち

——高校生が来場。

すごい緊張しますね。大人に話すのは緊張しないけど、高校生の前だと緊張します。いま、こういう話をしていたんだ。二十世紀と二十一世紀はどう違うかつ

ていう話。君らはだってもう二十世紀なんてちよこつとしか生きてないじゃん。えっ、まさか二十一世紀生まれではないよな、まだ。だけど二十世紀の記憶はないでしょう。物心ついたら二十一世紀だったというふうなこと。

この頃、高校生とこの間も議論したときに、「寺脇さん、教育の議論したい」って言うから行って、「はい、今日はどういうテーマがやりたいのかな」って言うと、度肝抜かれましたね。「二十二世紀の教育について議論したいんですが」って言われて。「はあ？」ってなっちゃった。さすがに。いつも私は「二十一世紀の教育」って言っているけども、二十二世紀という発想はなかったなあ。二十二世紀、私なんか一五〇歳じゃなきゃ生きてないから、そんなのあり得ない話なんだけどもね。言われてみりや、いまの高校生は二十二世紀まで生きている可能性はあるね。いまからだって八十五年後なんですからね。いま一八歳の子が一〇三歳まで生きれば二十二世紀。いま一〇三歳まで生きてる人なんてごろごろしていますから、これはある。ましてやいまの小生とかもう九十歳ちよつとで二十二世紀です。

しかも、またやられたなと思ったのが、そうか君ら  
そこまで長生きすることもありうるなつて。「いやいや、  
それは僕らも無理とは思いますが、僕らの子どもは二  
十二世紀を迎えるわけですよ」「おお、また一本取られ  
たな」と思つて。そうか、子供のことを考えておつた  
か、て言うんで。

## 二十二世紀に大学はない

二十二世紀はどうなるだろうね。まあ二十二世紀に  
はもう学校はないでしょうね。セルフラーニングの時  
代に当然なつていって、つまり学校に行かなくてもい  
ま学校で学ぶのと同じくらいのができるんでしょ  
う、多分。画面の中に先生がいて、その先生をどんど  
ん切り替えてこの先生の話聞きたいつてばつて出て  
きてやつていくとか、よくわかんないけどそんなこ  
とができてくるようになったら、なんで学校に通わな  
きゃいけないの？ あるいは「どこそこの学校に所属  
しなくてはならないの？」

今日うちの学校の自慢ばっかりさせてもらつて悪い  
すけど、ちよつと京大で自慢してきたつて今度言おう

と思つていますけどね。——京大でもこの頃はそんな  
のいるでしょうけど——私の授業を毎年聞きに来るや  
つがいるわけですよ。もう毎年聞きに来てくれるの  
は嬉しいけどさ、単位は一回しか出ないよつて言つて  
いる。「いや、単位をもらうために来ているんじゃない  
ですよ。学びたいから、この授業毎年違うこと言つて  
いるから面白い」つて。「毎年違うことやつてるよ、だ  
から面白いから来ました」みたいなこと言う子がいて。

もつと豪の者がいてですね、非常によく勉強する優  
秀な学生なのに、あいつ留年なんですよつて、卒業す  
るとき留年しているんですよ。なんであいつ留年した  
んだろうなと思つていたんです。それで一年後に卒業  
したんですけどね、「なんでお前留年したの、四年で卒  
業できただろう」つて。「いやいや、もともと五年の予  
定なんです」「ああそうか、じゃあ一年分は休学すると  
か映画をつくるとかそういうことか」「いやいや違つて  
一年分は実はよその大学の授業を聞いていたんです」。  
京大はね、大学が潜れるんですよ、東京の大学は厳  
しいから入口で守衛に捕まつたりしますけれども、京  
大は緩いからね。つまり京大でも大変お世話になつた

みたいですけども、「京大のあの先生の授業とろう」、  
「同志社のあの先生の授業とろう」、そうしたらその先生  
の授業聞きに行かなきゃいけない。それが自分のと  
この授業聞く暇がないので、四年では必要単位がとれ  
ないから、もともと五年いくつもりで、ということは一  
年の五分の一はよその大学を聞きに行けるっていう  
ことだな。——こういうものの考え方をするのか、と  
いうふうに思いましたよね。

まさに自分は学習者なんだから、主役の自分が自分  
で決めりゃいいことだっていうことと、自分が学習す  
ることにはみんな便宜を図ってくれよ、という欲望が  
あるんですね。そういうお世話になっているから、私  
のところも私の授業はいろんな人が聞きにきていいよ  
ってやっていきます。昔は文部省も野暮なこと言ってね、  
授業料も払ってないやつに聞かせるなとかいろいろ言  
うもんだから、単位交換すらできなかつたわけですけ  
ど、そこを自由にしていくとそんな学びのかたちがで  
きてくる。自分が学ぶということがなにより中心なん  
だ、ということですよ。

大学は「学ぶ」ところ。そのために「勉強」を

ちやうど高校生が来たからあれですけど、大学に高  
校生が来るのは当たり前ですよ。オープンキャンパ  
ス、京大なんかはそんなにやんないでしょうけど、う  
ちなんかは死にもの狂いだから月に一回くらいオーブ  
ンキャンパスやつてる勢いで、ばーつとやっています  
よね。でも中学生が来るという。これは京大も受け入  
れてくださった、神戸の中学校の二年生が、総合学習  
で大学ってどんなところを学びに行くっていうのがあ  
る。その中学にちやうど行ったんで、「どこに行くんで  
すか」って言ったら、「京大と同志社と立命と」みたい  
な話ですよ。「ぜひ京都造形芸術大学も入れてくださ  
いよ、うちも大歓迎ですから、来てくださいよ」。「行  
っていいんですか」。「どうぞ、どうぞ来てください」っ  
て。

そのときに、あれは行く前だったかな、公立の普通  
の中学二年生だったかな。そのあと中学生と話すとき、  
必ずその話をするんですけど、リアクションが日本中  
どここの中学に行っても同じですけどね。「はい、みんな

勉強という言葉と、学ぶという言葉は同じ意味ですか。同じ意味だと思ふ人手を上げて」って言ったら一人もあげませんね。「ということは勉強と学びは違うと思ってるんだな。うん、じゃあその違いを誰か言えるかな」と聞くと、ちよつと中学生には難しい。中学生にはそこを言語化するのちよつと難しい、まあそれはそうだろう。「じゃあもう一つ聞くけどさ、勉強が嫌だ、嫌いだ、たまんねえと思つたことのある人、手をあげてごらん」って言ったら、見事に全員が上げますよね。「はい、じゃあ今度は学ぶのが嫌だと思つたことがある人は手をあげてごらん」誰もあげないです。どこの学校だつて都会の学校だろうと田舎の学校だろうとそうなんです。「もう一つ聞くけど、じゃあその嫌な勉強つてやつをしなくてもいいと思つてる人は手を上げてごらん」って言うと、嬉しいことに、しなくてもいいと手をあげる人も一人もない。つまりそういうことだよな。勉強というものは嫌だけどやつぱりやらなきゃいけないよなと思つている。学ぶというのは、嫌じゃないわけだから、そら放つておいたつてやるわけだよな、楽しいよなつて思います。

そこでここからちよつと嘘つくんですけど、嘘つかざるを得ないのが悔しいですけど、「だから君たちな、絶対大学行つたほうがいいね。大学行かないやつは損だよ。だから行きなさい、とにかく。いまずぐ行かなくてもいいよ、いまずぐというのは中学だからすぐには行けないけど、高校卒業してすぐ行かなくてもいい。いくつになつたつて大学は受け入れてくれるんだから、つまり生きてるうちには大学というところには一回行かないと」つていう話です。

ここからがちよつと怪しいんだけどね「大学というのは勉強するところじゃないんだよ。大学は学ぶところなんです。大学の勉強が嫌だとかいう話はないんだよ、大学は学ぶところなんです」。だから、「じゃあなんで勉強しなくちゃいけないか」というと、当然、大学受験行かなくちゃいけない、高校受験行かなくちゃいけないつて話でやつていくわけだから、あるいは大学で学ぶための基礎力、英語がわかんないと大学の授業についていけないよとか。理系だつたら数学やつてないと大学の授業についていけないよ、そのためにやつていく。そのために嫌な勉強してんのに、本当に学ぶとい



うところやらなくちゃ損じゃん、なんのためにそんな苦勞してたんだよ、ってなるから必ず大学行きなさい。ただし、自分が学びたいことを見つけてから行けばいい。そうなんだよ」ってまあ残念ながら日本の大学はすべてがそうなっているわけじゃなくて、無理やり勉強させる大学もないわけではないので、全部そう言えないのは残念ですけど。

### 人生の目的は「学ぶ」こと

で、自分の大学の宣伝をすぐするわけです。「うちの大学は、京都造形芸術大学はもう本当に学びの伝統。勉強しているやつなんか一人もない。大体勉強嫌いで来ているんだから、みんな学んで」。「それこそね、京都造形芸術大学っていうところの先生なんだよ、私は。知らないでしょう、そんな大学。知ってる？ 知らないよね、でも京都大学は知っているよね。それなのにうちの大学のほうが京大よりいいって言ってひんしゆくをかってるわけなんです。というのは、土曜も日曜も学生が出てきて勉強しなくてやっっているし、夏休みもなかなかあいつら帰らなくて、映画つくると

かなんとして言ってやっっているし。授業料が京大の三倍くらいとっているから、元取らなければいけないと思っている部分もあるわけでしょうけれども。ご存知のように、なにしろ入学式のときに最初に言うわけですから。「この大学は君たちのための大学であって、ここにいる教授たちのための大学じゃない」とか言われちゃうんで、「君らが学ぶための場としてつくっている、君らがいなきゃこんな大学なんかすぐ潰してもいいんだ」とか理事長や学長が言うので、そこらへんはつきりさせられちゃっているっていうのはありますけどね。だから、学ぶというのがとにかく人生の目的。勉強するっていうのは手段にすぎない、目的を達成するための手段。でも手段がなきゃ目的は達成ができないから、こうなんだよという話をします。

今年、私、いま漫画学科をやっているんですけど、漫画学科のAO入試の合格者を集めた時に、入学予定の高校三年生にさっきの質問をちよつとしてみたら、違いは言える人って言ったら手をあげてちゃんと言ったやつが何人もいたんで、「おー、お前らすごいな、わかっててくれるんだ、上等上等。じゃあここでしつ

かり学ぼうじゃないか」というふうな話を言ったわけですよね。

人生の目的っていうのは勉強することではないです、学ぶことが目的です。「学ぶ」ということによって「働く」。働くっていうのは、なにも給料をもらうだけじゃなくって、小さい子の世話をするとか、お年寄りを助けてあげるといふようなことも含め、働きますね、世の中での働き。そしてもう一つは自分が「生きる」。どう生きたいの？ どういうふうに生きたいの？ というイメージを持つためには学ばなければいけない。だっているんな生き方があることを学ばないとどういう生き方を選んでいいかわからなかったりする。どういう働き方があるかを学ばないと、どういう働き方を自分が見ようと思うか、出てこないっていうのがあると思う。それをやっていくということなんです。

## 二十世紀は幸せだったか

二年生？ 君らは二年生か。いま、今年の高三世代はずいって話をしてたんだけど、そのなかでいま、ちょうどそこを科学的に証明しようとしていたとこだ

ったんです。この二十世紀と二十一世紀というのは分水嶺なんです。二十世紀を知らないあなたたちには誠に申し訳ないけど、二十一世紀はすくなくとも、二十世紀の日本より豊かにはなれません。なりません。むしろどっちかと言うと、ちよつと昔よりに下がっちゃうかもしれない。たとえば二十世紀の終わりくらいには、大学生が卒業のときに卒業旅行に行きましてね。それはたいがいヨーロッパに行きましてね。ヨーロッパに一週間くらい行って帰ってくる時には、有名ブランドの洋服とか香水とかをぶら下げて帰って来たんだけど、いまの大学生の卒業旅行はせいぜい海外っていったって、格安航空券でちよつとアジアに行ってくるくらいの変化が出てきています。

でさ、申し訳ないよね、こんなこと言って。君らの前までは人類はこうやって「右肩上がり」で成長してきました。常に経済成長して暮らして豊かになって、こう上がってきました。でもピークを迎えました。ごめん、これからはこんなに下がっちゃ困るから、これくらい下がるくらいで、ここぞなんとかしようぜって正直なところ思ってるわけです。

うちの学生たちにもよく授業で必ず言うんだけど、人類は二十世紀が一番しあわせだったのか、どうかかっていう議論をするわけ。一番豊かだったから一番しあわせだったよねっていうふうにも言える。でもその豊かになるために競争というやつをするわけだが、この競争が何を生むかっていうと、競争のいきつくところは戦争を生むんですね。なので二十世紀というの人類が一番豊かになった代わりに、人類が一番戦争をした。いまの「イスラム国」なんてかわいいもんですよ。一度に何十万も死ぬような戦争をしているわけなんだけど、二十世紀百年間で戦争で死んだ人ってどれくらいだと思う？ 地球全体で。

——(高校生) 一億人。

正解です。大体推定一億人死んでいる。一億人死んでいるということは、年平均一〇〇万人死んでる。しかももっと昔の戦争は、戦争で死ぬ人っていうのは兵隊で死ぬわけです。だけど二十世紀の戦争ってのは原爆もある、毒ガスもある、アウシュビッツの虐殺もあ

る。なのでこの一億人中九割以上が兵隊じゃない人だと言われています。原爆落とされたり空襲があったりしたら。

そんな百年間が本当に幸せだったと言えるのか。これからの時代は、あんなに豊かじゃないけども、戦争は二十世紀に比べればぜんぜん少なくなっちゃった。まだ残念ながら少し残ってるけども、それがなくなっていくたらどっちが幸せよって考えていかなくちやいけない。競争すれば戦争が起こるけど、共生というのはみんなが平和に共存する状態をつくっていくっていうことなんです。

### 「芸術の力で世界を平和にする」

今日は高校生も来たし、うちの大学の宣伝しちゃうけど、国立は建学の理念というのはいらないんですけども、しかし京大は京大のなんとなくあるじゃないですか。京都造形芸術大学というのは、芸術アートとデザインの大学なんですけど、建学の理念がこういうことなんだよ。「芸術の力で世界を平和にする」って思ってるんですよ。私この理念がとても素晴らしいと思

つたから、「教員採用のとき」「是非入れてください」って言って、厳しい面接を経て働かせていただいているわけですよ。

でもね——いま割と笑われなかったですね——私が就職した二〇〇七年頃はですね、「芸術の力で世界を平和にする」とか、真顔でわれわれ言っているんで笑われちゃうわけですよ。「そんなのできるわけないじゃん、はあ？」みたいな感じで。「カルト教団かい」みたいな感じで言われる。だからよく学生と言ってたんですよ。「カルト大学だよ、うちは。それでいいんだよ。みんなこれ信じてるんだから。うちの中では学生も教員もみんな信じてるんだからよ。それでいくんだよ」って言うたら、最近笑われなくなってきた。いいことだなと思う。なるほどねってだんだん理解してくれる人たちが増えてきた。つまり、もちろん戦争しかなかったところには音楽流したら止まるってそんなこと言ってるんじゃない。人間がアートの心をもつてくるっていうことは、モノよりも心のほうにウェイトがいくわけだから、よその国を征服してモノをとってこようとかってそんなこと思わなくてもよくなってくる。

つまり、競争には芸術は役に立たないんだけど、先生には芸術の心っていうのは役に立つんで。たとえば競争というのは同じ条件でみんな競争しようっていうか、基本的に同じことをみんなやれて言うこと。共生というのは逆に、いろんな違った人がいいよね。イスラムの人だっついていいよね。だけど人を殺したりするのはイスラムだろうとなんだろうとよくないけど、イスラムだから悪いわけじゃない。でも全然あの人たちはわれわれとは考え方も違ったり、習慣も違ったり、ルールもいろんなことが違います。でもその違いを認めていくのかどうかという問題になる。違いというのは、芸術って違つてないと芸術になんないんだよ。みんな同じ絵を描いたって芸術じゃないじゃん。みんなが違う絵描くから上手い人も下手な人もいろいろんなものを創るから。違いを認めていって、そうか俺はそんな絵描いたけど君はこんな絵描くのか、なかなかいいところあるね、みたいなことです。だからうちの大学来ていいなと思うのは、まあそれがダメって怒る人は怒るだろうけど、ガツガツ同級生で競争するみたいなのがないんですよ。同級生が良い作品

をつくると、これを褒めるんだよな、それだけいいモノを創れないやつらも。「あいつの作品いいんですよね、これ本当に良かったですよね」っていうふうに言う。

それを昔の大人たち、この時代の大人たちからすれば「なんだお前だらしがない。よその人間がいいの作つたら良かったですねって、へらへら笑つてるんじゃないやないよ。俺はあんなの「より」もつといいの作つてやる」とか、そういうふうに言うんでしようけどね。それはもちろんもつといいのつくつていいんだけどね、まず「いいものはいいと認めていく」みたいなことというのが必要になってくるし、あるいは「自分にはわからないものを、それをわかるうとするというようなこと」が必要なんですね。

### 世界を切り替えよう

実は世界を切り替えていかなきゃいけないと思つて世界は動いている。ヨーロッパも苦労してるとは思いますがよ。でも、ほらヨーロッパ一つでしよう。お金もユーロつてお金でやつてるわけでしょう。EUつてところでやつてるでしょう。まだ内部的にはぶつく

さ言つてますよ。なんでこんなに勤勉に働いて金儲けのドイツがあんな遊んでるギリシヤを助けなきゃいけないのか、とかいろいろは言つてますよ。そうは言つたつてみんなで助けてる。そりやぶつくさはありますよ。俺は一生懸命働いてるこんなにたくさん税金納めてるのに、それで助けてやつてるやつもいるみたなこと言つてたらきりがいい。

同じことだよ。そうは言いながら助けようと思つてる、同じ日本人だから自分の税金で貧しい人を助けるのは構わないよつて思つてるように、ヨーロッパもEUつていう一つのかたまりになって、みんな同じだよ、この中で戦争したつてしようがないよ。なにしろあそこが一番戦争がたくさんされてるところですから、みんな仲良くなつて共生していこうつて話になつてる。そんなすぐにはいかないですよ、そうやつてEUは一緒になつたけど、そこにイスラム「教の」人がいると、差別しちやつたりするみたいなことはあつたりするから。

## PISAと共生

最後に言いますけど、高校生も知っているかな、PISA調査というテストがあるんだよ。なんの略かわからないけど。PISA調査っていう調査があつて、世界の子供が受ける学力テストと言われるんだけど、学力テストじゃないんですよ。「人と共生していける力があるかどうか」というテストだと平たく考えればいいです。

日本人はすぐ学力テストって言っちゃうから話がネジ曲がつてきちゃう。読解力を試すって国語の試験みたいだけど、あれはコミュニケーション能力を試してるんだし、数学的リテラシーを試しますって言うのと、数学のテストみたいに勘違いしているけど、それは論理的に物を考えることができるかっていうことを試してみる、そういうようなテストがあるの。これはヨーロッパの人たちがつくりました。フランスでつくつてます。これをつくつているのがOECDという、世界の上から三十何カ国の豊かな国々。つまり貧しい国々を援助する役割をしていかなきゃいけない国々ですよね。

この国々はさつきから言っているように、ずいぶん豊かだったんだから、ちよつと下がつていけよ。だつてこの時代にずつと貧しかったところもあるわけだから。前貧しかったところはちよつとまだ上がつてかなくやいけないです。中国とかインドとか東南アジアとかアフリカとか、そういうところは上がつてかなくやいけない。そうするとこつちはちよいと我慢しなくやいけない。我慢してそういう人たちと仲良くしながら共生していきましょうと。その力があるかどうか、その力をもつてないとダメだよねっていうんで、その力をはかるテストっていうのを文字通り二一世紀に入る二〇〇〇年からはじめちゃつたわけですよ。

二〇〇〇年にそのテストやつたら日本は三十何カ国中の八番か九番かそのへんだつたの。いま君らが来る前に最初に言つてた話で、「いまの子どもは学力が低い」という人がいるが」とんでもない。昔の子どもの場合は常に世界で一番だつたのに、という大騒ぎが起こつちゃつて、学力低下だと言われた。

たしかに二十世紀の間でそういうテストやると日本は常に一番、世界で一番だつた。でもそのテストは理

科の入学試験問題と数学の入学試験問題を解く、つまり競争するためのテストだったのでそこでは一番だった。ヨーロッパの人たちですごく立派で尊敬してますけど、一方でちよつと意地悪なところがあります。

威張つてるところがあります、自分が悪いとすぐにルールを変えちゃう。スポーツなんかも日本がちよつと強かったりするとルールを変える。柔道やバレーボールのルール変えちゃいましたみたいな話が出てくる。プライドが高いですよね、世界の一番文明を守つて来た。

### PISAの点数で一喜一憂

「いまやアメリカや日本が経済大国つて言ってるけどな、俺たちは二一世紀の新しいこういうことをちゃんと考えて言ってるんだ」というプライドは持っている。なのでこのテスト「PISA」やってみたらさ、きつと日本やアメリカは低いぜつて思つてやつたら、案の定、日本が一番だったはずが八番か九番になつちやつて、アメリカはうんと下ですよ。上位は全部ね、フィンランドとかデンマークとか入つてきて、ヨーロッパ

の国々が上位に入つて来た。それで「けしからんじゃないか」つて話になつて、この頃私は文部科学省に勤めていたので、わあわあ言つてくるわけですよ、「これこんなひどい低い成績、八番か九番でいいのか」つて言うから。

これ言うど怒られるけど、私なんでも怒られても言つちやうけど、いやむしろ私に言わせれば「よく八番か九番とれてたな」と思いますよね。前と全然違うルールで別のことやつてるのに、あつちで一番でこつちで八番ならいいじゃないですかと言いたいけど、きつと皆さんそう言うど怒るでしょうから、八番九番、この力をあげていないといけないつて思いますよ。あげていくために二〇〇二年から教育の内容を変えて、今日君らが「特別展の会場で探究」ポスター「発表」でやつてくれたように、探究型の学習を入れていくとか、学ば側、学習者を中心にした教育に変えていこうとしてるんで、その二年前の成果を言われてもそんなもんで、それからこれが上がんなかつたら叩かれてもしょうがないけど、ですね。

これは三年ごとにやるんだな。次に二〇〇三年にや

ったんですね。二〇〇三年にやったら全然上がってなかった。全然上がってなかったって言ったって、本当はちよつと上がってるんです。なぜかっていうと、三年の調査のときから参加国数が一・五倍くらいになっちゃってる。つまりこのOECD諸国以外のところも、受けたらいいって言って受けさせたもんだから。そして、しかも国じやなくても受けていいよってしたもんだから、北京市が受けたら、上海市が受けたら、香港が受けたらするようなどころが入ってきたんで、日本横ばいとか書かれたけど、「なんて数学的リテラシーのないマスコミのやつら」と思いましたよ。

ふつう考えてみたらね、三十人のクラスに一五人転校してきて、順位下がらなかつたら頑張ったって言うてほしいじゃんか。母数が大きくなってるんだから。本当はちよつと下がって当たりまえのところを。「まあでもいいや、言わせておけ」と思ったら、今度は〇六年にやったときにちよつと上がったのね。〇九年にやったときにはもうちよつと目に見えて上がった。そして二〇一二年にやったときに遂に、OECD諸国中でもっともいい成績をおさめることが出来たんですね。

### 日本の教育は頑張っている

でも知らないでしょう。専門のみなさんは知っているかもしれないけど。だって新聞にはそう書いてないもん。日本は五番くらいになって、まあ上がったと。良かったと。新聞はこう書いています。日本は五番ぐらいになったと。しかもそれは脱ゆとりでやったからこうやってあがったんだみたいな報道になったんだよね。

まともな人——別に私はまともじゃないですけど——池上彰さんなんかはちゃんとそれを新聞に書いてある。この報道はおかしい。なぜならまず、五番目と言っても日本より上にいるのは上海と北京と香港とシンガポール。「この三十カ国の中で」PIISAの結果を受けて教育政策を「どうやっていくのか、国として」現状の教育政策は「どうなのか」って話なんだから、それで測れば「国家単位で考えれば」一番。

なので、日本以外の国は日本が一番だと思ってるんですよ。韓国は二番目に高かったのね。韓国政府は「俺たち頑張って一番になれたと思ったのに、日本はもっ



とやってたのか」みたいな談話を、感想を述べてるし、この問題をつくったフランスのO.E.C.D.の担当者は、「よく、たった十年ほどの間にここまでよくきたね。日本って恐ろしいね、日本の学校の先生ってすごいね」というふうに言ってくれてるんです。「日本の学校の先生はよく取り組んだね」。はっきり書いてますよ。この十年の間の日本の学校の先生の頑張ったことに敬意を表したいと、あのプライドの高いヨーロッパ人がちゃんとそう言ってくれています。

ただしね、それって小中学校の先生の話よ。高校と大学は褒められていません。なぜかというところ、この試験を受けるのは中学を卒業したばかりの人が受ける。世界中の。だから高校一年生のはじめに受けるわけですよ。だからさ、いくら成績が良かったって高校の先生のおかげじゃないし、ましてや大学の先生なんて関係ない。日本の小中学校の先生がいかに、君たち若者が、生徒たちが学習するということを応援しよう。そして、共生できる人間を育てていこうと思っただけで命やってくれた「か」の結果が、そこに出てるわけなんですよ。

それが二〇一二年に高校一年生ということは、いま高校三年の連中だよ。君らの代が受けてたら、やっぱり良い成績とってたと思うよ、この前後は。だけど三年にいったんしかないと、そういふかたちになっちゃった。二〇一二年に高校一年生の子どもは、何年に小学校に入ったでしょうか。九年前に入ってるわけだよ。二〇一二年の九年前はいつですか、二〇〇三年ですよ。ゆとり教育がはじまったころに入って、それをずっと受けてきて、脱ゆとりだとかいうのはこのあたり「二〇〇〇年前後」からそういうことやってるから。このあたりで脱ゆとりって騒いだの。脱ゆとりって騒いだら成績がよくなった。そうじゃないだろう。こっからやってるからこうなってるんですよ。

そこがやっぱり日本のメディアは、あるいは日本の大人はそう思っていない。いいんですよ、別に人から思われるために学んでるんじゃないもんな。自分たちでこの手応えがあるよって思ってくればいいんで、別にそういう人たちから、お前らえらいなと思ってる必要なくて、俺たちやっただけでいいんですよ。さらに大学入ったら学ぼうと思ってくればいいんですよ。

## 順位をつけることと「競争から共生へ」

私も便宜上、一番になったとか言いましたけど、こういうの大嫌いなんだよ。一番とか二番とか関係ないから。自分で満足いくことができたかという話でしょう。そりゃ君らもああいふポスター発表するとよそと比べてどうなんだろう、と感じるかもしれない。「あれはすげえな、俺よりすげえ」って思ってるかもしれない。それが何番だとか同じ学校の生徒なのにさ。あいつより上じやなきや嫌だとかさ。そういういいことないでしょう。

ところが大人は、日本の同じ中でもこれとは全然違う全国一斉学力テスト「全国学力・学習状況調査」というのをやって、何県が一番だとか言って、秋田県が一番、沖縄県が四七番だとか言ってつけてやってるわけだよ。一番に順位をあげるために特訓しろとか言ってます。

沖縄って行ったことある？ 修学旅行で行った？ 沖縄ってなんとなく違うでしょう、日本と。もともと民族が違うし、文化も違うし歴史も違うのを、日本

が無理やり同じ国にしちゃっているだけの話なんだから。歴史を勉強すればわかるけど。でも沖縄の人は日本と仲良く共生しようと思っているから一緒にやっているんだけどね。沖縄ってね、ずっと四七番なの、全国学力一斉テストやってきてこの七、八年間。

で、沖縄行つて、「順位上げようとかって話はないんですかね」って、わざと聞いてみたら、沖縄の人が「でも沖縄の順位が上がったら、どこかがビリになるもんね」。つまり、沖縄がビリじゃなくなるといことは誰かをビリにするということだもんね。結果的にそうなるのはいいけど、ビリを抜け出そうということは、誰かをビリにしようとか叫んでいるのと同じことなんだから、言わんわつて。別にそれで何番というのはいないよ。だけど沖縄の子供に力をつけて欲しいとは思って一生懸命やってますよ。だから実は沖縄県は順位は全然変わらんんだけど、四六位との差はどんどん縮まってきたるんですよ。

つまり、本土の子と同じように力をつけてやろうよとは思ってる。(奈良の高校性に向かつて)奈良県と京都府とどっちが上だとか考えてどうすんのさ。そんな

に憎いか？ 憎くないよな。同じ日本なんだし。ひょっとすると京都府から奈良県に通って来ている人だっているのかもしれないしさ。そういうもんなんじゃない。

そうしてみると、この一億人も死なない二一世紀にするためにはさ、国もそう思ったらいと思うんで、PISA調査で日本が一番になったからって浮かれることはない。けど手ごたえはあるんだから、この手ごたえあることをもつとやったほうがいい。子どもたちもこれでいいんだって思ってたほしいし、僕らも学校のあり方をそう変えていきたいと思う。正直なところ、PISA調査の結果が出たときに、私が一番気になるのはアメリカの順位なんだ。アメリカ子どもがこの心をもつてくれて、すごいアメリカが持つてるぞってなればもつとも世界が平和になる可能性が高いので、日本はもつとも少なくともいまのところ戦争はしないよって誓って七十年もやっているとかなんだから、共生の心が仮になかったとしても、つまり戦争をやりたい人がいたとしても、できない仕組みになっているんだから、そこはまだいい。世界の全体からいうと。やる

うと思えばいつでもできる人たちが、やっぱりやめて競争から共生へいこうねって思ってくるといいかなあって思っちゃう。そういう考え方が共生の考え方であるということだと思っくんすね。

### 消滅市町村と共生型社会

最後に、奈良県のどのへんにあるの学校、奈良市じゃないわけ？

——（高校生）奈良市じゃない、御所市です。

御所市って人口何人くらい？ 「消滅市町村」って知ってる？ 御所市は消滅側？ 大丈夫？

あれネット上で地図見るとすごいよな。色分けしてあってさ、安全なところが緑でさ、絶対ここは残るよって。危ないところは赤で、絶対だめってところ紫になっちゃってるけど。

あれなんて東北地方なんかほとんど全部そうなっちゃってるよね。あれも同じことで、日本の中で競争したら都市が勝つから、どんどん人は東京や大阪や京都

に集まってくるわけだけど。じつは日本国内でも共生して、便利などころにみんなが集まるわけじゃなくて、いろんなところでみんながいろんなことやっつて、暮らしていけるというふうにしなきゃいけないと思うからね。日本はいまのところ、よその国と戦争する心配はちよいとはあるけど、あんまりない。

だけど日本国内がおかしなことになっちゃう。だつて考えてみるよ。大人はそうなつたら人を一カ所に集めて便利にしていこうとかつて言つてますよ。「コンパクトシティ」つて言つてるんですけどね。例えば御所市、人口が少なくなつてきたら、その少ない人口を中心部に全部集めちゃうつて、あとそこらへん住んでる人こつち移して。そうするとこで病院と学校つくつて大丈夫だからつて。それは理屈ではわかるけどさ。ということ、人が住んでいない広大な土地が出来るつていうことだよ。

それについての想像力、それがアートする心だと思いません。想像力というのはイマジネーションのこと。クリエイティブのほうの創造力もあるんだけど。だつて見たことないでしょう。福島原発の事故で人が

いなくなつてしまつたところがいまだどうなつてののかというのを。あれ、たかだか原発から三十キロ二十キロのところだけになつたつて、あんな恐ろしい風景が出るのを、「消滅市町村地図」を見たら、面積で言えば日本の半分くらいがああいうことになっちゃうわけだよ。その日本つてどうなるつていう感じだね。いま日本はどこの田舎に旅して行つても電車に乗つてると家がある。ああ、あそこに人が暮らしてるんだなつて思う。畑がある、こゝでなにかをつくつてるんだな。牛がいる、みたいなことを見るから。

あれ二〇四〇年だぜ、消滅するつて言われてるの。二〇四〇年になつたらさ、都市部はいいけど、ちよつと都市部を電車で離れると、あの福島の光景がずつと広がつていふつて。嫌だよ。二五年後だよ、君たちはどうしてる？ 四十代前半くらいでしょ、子供がいるよね、結婚してるよね、仕事してるよね。私なんかはね、その頃九十歳くらいだから大体この世にはいませんからいいんですけども、どうなの、さつき君らの子どもはそんなところで育つてみたいないことを考えたら、いまからじつは二五年先を見据えて、そうな

らないようにするってことを考えていかなきゃいけないさ。

なのでいままでの日本の教育というのは、競争に勝ち抜いて東京や関西で活躍する人を育てるって言うけど、今度は逆だ。東京で生まれた人で、いや自分はちよつと北海道でやってみるといのがあってもいいじゃないか。そういうこともあり。無理やり行かせることじゃないですよ。お前らがずっと東京で暮らしたんだから、今度あつち行つて苦労しろとかそういう意味じゃなくなつて。そこ行つて何かをやろうということを考えていく、ということだと思ふんですね。

(京都造形芸術大学教授)

プロフィール：

東京大学法学部卒業後、文部省（当時）入省。職業教育課長、広島県教育長、医学教育課長、生涯学習振興課長、政策課長、大臣官房審議官（生涯学習政策担当）、文化庁文化部長などを歴任。平成 18（2006）年 11 月退官。現在 京都造形芸術大学教授、映画評論家、NPO 教育支援協会チーフ・コーディネーター、ジャパンフィルムコミッション理事長。現在「映画芸術」などさまざまなメディアに映画評を書く。著書に『『学ぶ力』を取り戻す』（慶應義塾大学出版会）、『文部科学省～「三流官庁」の知られざる素顔』（中公新書ラクレ）、『「フクシマ以後」の生き方は若者に関け』（主婦の友社）など。